

俳句本日

七 月 號

第一卷 第二號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和十九年七月三十日(每月一回)發行



志江

昭和十九年七月二十五日印刷納本

俳句日本 第一卷第二號

曆 雲 壇	荻原井泉水選	(一)
陸 集	西垣正禪子選	(五)
海 紅 句 錄	中塚一碧樓選	(三)
俳句日本の使命に就いて	米 倉 勇 美	(三)
非定型俳句の總蹶起に就いて	安 齋 櫻 礪 子	(三)
決戦下の俳句研究	秋 山 秋 紅 蓼	(三)
一角より	荻原井泉水	(三)
各家近什		(三)
句 席		(三)
句 評		(三)
句 輯		(三)
みいくさ集		(三)

表 紙 望月春江畫伯

有隣亭 蔵書

層雲壇其一 井泉水選

豊橋 鈴木折嶺

船頭さん風呂にいく松の芽に港の日は落ちずにある
けふ習つたところ讀んでる子の家の前くてもどる
菓箱の口のまはりのみつばち傘はいらなくなつてある
空が海のやうな風が魚のやうな池に映つてある
芽が葉になる 葉のなか梅になる

京都 井上充夫

ビール一本とよもぎつんできた君が君の休電日
葉わらくはへて畑から雀が、このごろの空
わすれな草の小さい空いろ子供いたどりをとり
まいて配給の豆が芽を出したので奥さんと奥さん
いつものほほじろいつものとこでなければよあけのかあてん

石川 片岡樹裏人

あさひ松の葉松の葉にさしわたり經堂にも
茹でてさらに青うなりしよもぎを干したり
みつすましくるとみつすましにみつすましが来る水
普譚小屋が一つ小さくて春のあめ、に波よせてある
あさの日が堰をおつる水のおとしておちてある

新潟 金井三良

谷の雪を薪曳く晝曳くみちの雨の降る春
樹から樹へ雀のとぶときのうち春の空
どんどん焚く火のじんじん沸いた一ぶくたまはる

二三日春の雨鉢に降らしてつとめ休んである
もう雪にはならない雨の降る降る漏るところが春
川崎 北田千秋子

疎開を急ぐ春は花の散り急ぐ
櫻さくこれの通信機に魂籠める
ことしまた爆音に咲く花のらんまんとさく
庭に櫻に向ひ各々日々當の如く
櫻さかりにして此邊敵前家をこぼつ

駐〇〇 加藤裸秋

火山灰山日ざすと桃さく畑家があり
米山はまだ雪の保線夫と百合根掘りと
うしろすぐ海の夏めく良寛堂は松の木松の芯
俵は芋種のときますうぐひすがきてある
橋と變電所とそのあたり根雪にして木々は春

横濱 東松八洲雄

日のさすと眩しく越後は刈田の雪連山の雪
ふるさと讀經の聲も家のかげにある汚れた雪
鴉がなくので夕日の雪の南天の實
縮笹の雪ゆくに鶯、音は雪の下を流れてある
むかし一茶さん薬とりに吉間へ山のかたち雪

岐阜 水谷青杜

石に水うつと光もつ月が十日ごろの夏
雨蛙、一日あれば一日客のある
子供習字してある雨の日どうだんの花
松に育つ鳶の子と春になる海をこの頃
松と藤の花お祭がくもつてしまふ

海軍 遠藤 虹水

汗に颯の黒きつやつやとつぶらなる朝が京の春
京ことばよろしと思ふ宿にゐて若葉電車に乗り若葉
深夜の音が艦つくる夜業の灯が星のさんらん
花のちりしいて鳥居のあたり海の見える少年工たち
ばくおん新鋭つばさをつらね、春雷のすぎてより

東京 平松 星童

昨日までの君ではない君のいつものほほゑみけふは征く
夕日 が草の たけ 射撃 演習 完了
童子かけてきたかほのほてりしてすももの花
朝の鐘ふりにでた小使さん、に山の雪もう春
春の 白雲、印刷機は紙をたべてははく

東京 佐藤 康治

機械の騒音を遠くに櫻、繻帯の白さである
雨の日歸つてうちの屋根雨の音する春
増産増産富士は煙突の林立の間にある
風が往來からピイルびんなど見せてある夏
ふきのとほろにがさをのめばのめる酒にて

栃木 栃本よし雄

日ざし枯木にさし寫眞やさんの窓ちよつと寄つてはゆく
多木ざくらに日のくれの院長さんは俵でもどつた日ざし
月が海から、粟の穂がたれてゐる道をもどり
その顔日灼けた兵隊さんと花のすんださくらの下
ふと旅にあることも蟹のながい目に日ざしあたたかし

栃木 植田 市籠

驛長さん茶畑少しもつて朝晩みてるトンネルの口が雨

工場に出入る舟と芽どきの木をうつす川が潮どき

山に山の影朝はわらびのかげ
葱坊主頭を揃へ、雷山の方でなつてゐる
ゆうびん屋さんお寺が一軒あるきりの道本母の花

平塚 瀧山 重三

散り時が来て雨のさくらすこしはたけしてあるところ
牡丹はほんにほたんいろ白日蟻が歩いてゐる
松のこぼす花粉が晝の浪音がしてゐる藤椅子
ほたるなんとなくからだよこにしてゐると浪おと
てふてふ、夏が屋根を重ねてゐるそのさきの海で

福岡 津田 笹彦

すずしさをわら屋根に夏の落葉するところ(望東尼庵)
月の水車がまはつてゐると小屋にぢいさんがゐるのです
山の中のここの學校で映畫があるさうなほうたる
川には大きな石が山ふかく月夜となる
ふつたあとの雲がうごいてゐる月夜

銚子 名雪 理輝

この頃朝早く日のあたり梅の花白
ちよつとした廠舎があるとアンテナの空おそ春
雲が夏めく木造船いそぐ大工さんおほせい
朝日、するどく麥の穂並らみ抜いて穂の立ち一畝一畝

大阪 宇佐美 一步

多を畑してゐる中學生とその父老農夫
句心 ひざびさな、みんな芽ぶいてゐる
菜の花桃の花とうらかな風景にしてたくまじき爆音
春光あまねし畑道折れ曲つてゆくにぬくとし

東京 落窪 京太郎

辨慶橋の蟲屋の屋臺おいてあるばかりの日ざかり
あさあさ子供に見送られてけさは萩さく
萩に明るい雨ふる窓、蕨大印譜見てある
解除となつてからの萩の花、空映す水も

馬山 山本木天蓼

汽罐が蒸氣はいてある夜のさくら
穂麥のうへに水のすうつと船のゆく
春の潮みちてくるに巖にゐて鳴くや
菜の花、まだ日が一ぱいの潮みちてゐる

熊本 木庭皓龍子

星空短形に菱形にピルの上サアライト交錯
すつかり葉櫻をなつてゐる外人教師のたばこのけむり
大みこころ 休暇を賜ふ一日書を讀みて静けし春空(靖國祭)
青葉しづくするオランダ墓青い光の中雨やんでゐる

吳 飯田露草

しあはせもふしあはせも夫婦ふたりの箸ばこの箸
花が葉になるこんぼんつきよの二人であるく
そのお隣も沈丁花つとめあさはあるいてゆく
水が米搗く音の或は遠くて月夜芽をふく

東京 浅井冠二

墓のなか蟬が鳴きだして一つ木
散るときの傘にふる雨
雨から青い山肌がはれてきてポスト
ふつと父のゐないことが蚊帳のほひ、吊手

神戸 三好叢一路

素あはせにて町の裏が苗田くらい道
學徒もここにきて青葉しづかに青きその中(學徒動員)

青葉が朝は消えてゐる 殘置燈
蝶のうしろからくるのも一本みち
山形 佐藤逸仙子

朝のほけたつ蔭膳もある日のさしいただきます
風にまふ葉のくるくるくるまやさん
水にうつつたりしてせきれいが降りみ降らずみ
雪まだらなる鳥の五六羽まだ日のくれない
栃木 日向野秀策

いへぬち英靈見えぐみまつかにくもり日
お茶をもむむふ土間にきてゐた葉書一枚
時計ボンボンしよつていく夕立はれてゐる
雨におちた柿の花掃いたあとの柿のはな月夜
東京 三輪 薫

三機 五機編隊で五月は桐の咲く空
ひびの手あかぎれの手千人針縫つていただく
梅の花ざかりお墓詣りにゆく道犬もゆく
沼津 内久根聖巳

暮れるには間のある菜の花少年工喇叭演習
雲雀啼いてゐる見えてゐる少年工達と一緒に
春になる雨が山をかくして降る一本橋
石川 高崎 貞之

壁、春は朝はやい日がさいとる
見えなくなつても見送つてゐる枯れてゐる
雪やんでゐるえんとつの笠

濱松 細谷 野 落

咲きそめて櫻朝がはやくて産業戦士
紺のかほる春着モンペに仕立て寝押してある
勤勞暮遅き灯をいれた汽車でかへり
桐の花さく颯爽として女子挺身隊

静岡 佐藤 専子

しぐれのやんだ松のいろと竹のいろと
麥、笛ならして西にある太陽おちない
波音、そらまめは下から實になる
てふてふよ花があまりおほすぎる

長野 前田 若水

御岳の雪や大椽芽ぶくみなひかりもつ
隧道からの發破がひびきひるどきのくさ
雪やまたべのかはづ鳴くたんぼがある
學徒食前黙禱の膝を揃へ水音もう夏

朝鮮 本多 閑嶺

女學生あさのポストへいれてゆく梅の實青し
夏雲の海が静かに小舟で釣する港の口で
麥が穂となるこの譽の家の柿の木葉となる
汽車が通り朝日の青い麥の穂内餅一體

福岡 鹿谷 皓樹

道のあめがやんだ桃の花かな
もう花もおしまひの銅像が應召です
晝からはあつくなる木のいちじく
鳥にも櫻の、汐が干けば歩けるので

東京 淨心寺 惇

窓を開いて春だよ朝だよ子供だよ
芽ぶけばとて焼場の赤い煉瓦のかま
一本の花に朝日が屋上で體操してある
洋服で下駄で花が咲いてる

平塚 青木美岐雄

らんぶのほやがちよつと煤けて消えてゐた夏朝
朝の、すこし汚れて落ちた木の實など雨がつてある
三月、今朝もからすが啼いてからのいつもの松の木
水に散るので朝日してゐる

松山 村瀬汀火骨

島のむこうから船ふねのふえ夕の櫻
ふつてちりふいてちり月となるにて
蝶のさからひかねるほどな風の、橋

岡山 近藤次良

生活が簡素になつた松の葉の豊かに暮れてゐる
戻りは涼しい道のひとりになつて戻る
つくづくとけふまでのことをつくづくほうし鳴く

熊本 白石黙忍禱

そらが さざなみ
若葉になりて柿の木家のまはり陽のさして掃く
脈の細さをにぎつてくださるふた親をらるる
湯の落つる音もくらくなつてきた部屋のみすま

新潟 皆川 蓼二

本屋に人が一ぱいゐて本を見あげてゐて春
春の海の静かな造船所建物棟上
念々常懺悔骨壺は軽きかな空のいつくしきかな

大阪 南川 鴻亮

いばらの花日の落ちる井戸汲んでゆく
春風の満ち足りた階段一人二人とおりてゆく
富山 畠山 實治

いま暮れようとすると大きな光遠い島がある
水のある溝には月があるみぞそば
六月豊かな麥、鎌入れるひまなくて征く

京都 萩原 萩

征くときまつて朝雀の鳴きつつじの白し
征くとして日に山青く日に雲湧く
夕日の花をあるく鴉、馬の鋤くそば
横須賀 長島 夕汀子

ここから小さい汽車コトコトわかれていく
けふ骨の父を抱いて村を通る桑の實
夕方になつてからがながい豆の皮むいてある

長野 關口 江畔

つばなつばな風が夕風となる
もやが波音のない山松の新芽
青い木赤い實をもち大晦日勤勞
愛知 田島 素琴

雪雀の聲、一人世帯の配給うけにゆく
山にも藤の、藤活けてけふは佛の日
あとにはひとり水仙の花白し

兵庫 岡田 琅玕

見はなされたむすめゆりんと汁しぼつてある妻よ
麥の穂あさ通りひる通り雲もない空
どちらも麥の青さの風が通る汽車がすいてある
大阪 三浦 香女

初夏の光線に一個の果物をおく、朝
日毎日射しが強くなり花びらの散つためしべ
庭のすみはたけにしてぼたんには蜂がきてある

和歌山 瀬川 水音樓

ぶどう畑のあちこち雪が残つて空が河内國原
草にすわり草をつみくさの中くさ
風に散る花の木を切つてある
長崎 森 久樹男

すずめ窠にするもの持つてゆく白桃の花
からたちの花夕べ挺身隊の娘が歸つてある
ほんのり暮れてきたお祭の空松の花匂ふてある

川越 井上 紅嵐

家督相續もすませてこれからの事を日ざかりの豆の蔓(父を喪ふ三)
もう骨壺をだいて歸るばかりのかげのない日ざかり
忌 あ け の 木 の う め

花に列んで静かさは軍人訓終り
奉安殿には遠く禮してゆくにて蝶々
蜂の足長く夕日の窠にとりつきたり

釜山 田中 操

梅はさして春は見えてある硝子障子
御神酒いただいて山の春に雪残る杉の木
櫻さく學校が聞えてある畑を打つてある

朝々梅のちりそめしもののおく奉安殿

横濱 青木 青夫

暮れないうちの星が一つ二つ梅咲く
松山松のしん晝ふかく歎の音する

兵庫 金平 二火

松の葉雨雫する早春の遠く浪音
雨の名残りの朝もやの杉木立の奥さくら
橋と交番があつて櫻二三本の、満開

三重 小松 途從

輪轉機の音と人の流れと鳩の群れ翔ぶ夏空と
青葉に雀、煙草の煙輪にふいてゐる

福岡 井形 春一

月もなにか白ふもののおぼろである
潮風、石の扉めぐらして麥の穂
春光、潮のしぶき、舟の中傘さしてゐる

福井 森田 十雨

豆がおはぐろつけてゐる母の正週忌
ぼろぼろ柿の花散る子供等モンペでならんでゆく

長野 高橋 政二

波に雨ふる棧橋のから船春のゆく
雨は蓑笠着る程もなく鋤けば濡るるともなく
また一枚は脱いで鋤けば春蟬鳴きしきり

神戸 磯崎 雄一

種芋すでに芽を出してゐる白い芽出して植ゑた
けふは風ふく櫻となつて學校や役場や

釜山 田中 登貴枝

寮生たちもどり部屋部屋ともししづかな花の雨
春の白い雲買つて一冊の本樂しくもどる
さくらちる石段かづよんでのほり湖が見える

佐賀 山鹿 玲瓏子

石をはこびはこび日が暮れて花のいちにち
針がみんな針山にもどりねようと云ふ

長崎 小西 佛舍利

油でよごれた手の、服の、さくら咲きさくら散る
木の影が青くて石、草をとる

吹田 青 應香

洗つて箆においてある芹の葉や霜月日和
比奈久湯町の竹細工竹の籠買ふてえんだうも

熊本 石原 元寛

葦も芽ぶいてゐる橋をぬけてきてそのむかふの橋
あかあかと鐵をとろかす夜の火が空

東京 村田 藤庵

豌豆の花雨やみ日のさしぼんぼん船着けて行く
お宮の隣りは郵便局それから學校の櫻満開

秋田 増村 辰郎

蒲公英白い花の日蔭は水の音してゐる
松には鶉の巢があらう鶉がある巖の白雲

長岡 山岸 稻青

かきつばた洋傘もつて別れて行く
月夜の 新緑が傳道館の白壁

長野 太田 鐵石

川越 横 關 碧 樓 日 曜 白 い 緋 帶 して い で て 風 に 散 る 花 東 京 角 田 重 信

見 舞 ふ と 起 き て り て 日 か げ の 雪 が じ く じ く と げ て る 山 羊 は 放 し 飼 に して こ こ め 花 さ か せ て り て 一 軒 送 ら れ て 青 麥 風 に な び く 中 出 て 征 く い ち に ち か つ こ う 日 を ひ く く して か う こ う 鳴 い て る 久 々 に 歸 り て 落 の 花 萼 の 芽 あ た た か し 衰 蟲 冬 枯 れ て る の も 子 を 征 か して る 石 川 太 平 成 正 朝 の 道 の 櫻 さ く 家 も 子 供 が 新 聞 配 つ て ゆ く 祭 の 笛 を 遠 く 菜 の 花 月 夜 決 意 を 空 に 黙 つ て 靴 磨 く 子 で 梨 の 花 咲 く 葉 櫻 し づ か に 解 除 の 朝 交 番 掃 い て る 若 葉 に 青 葉 葉 書 に も 切 手 を は る 東 京 伊 澤 元 美

山 形 齋 藤 て つ 人 更 泉 畑 に 豆 の 花 萼 の 花 は 畑 の へ り に 白 い ひ ぐ れ で も う セ ル を 着 た 人 も り て 犬 と 橋 の 人 日 で す た あ れ も る な い 鏡 の 中 通 り 青 葉 に な つ と る 静 岡 澤 本 正

子 ど も 菜 の 花 匂 ふ 一 本 も つ て つ い て くる 車 に 草 積 ん で 草 の 花 吹 か れ て 行 く 兵 庫 平 位 青 水 葉 櫻 し づ か に 解 除 の 朝 交 番 掃 い て る 若 葉 に 青 葉 葉 書 に も 切 手 を は る 東 京 伊 澤 元 美

青 葉 や ほ と と ぎ す や 征 く と て 來 て る 雀 と べ て 親 子 柿 が 花 に な つ て る 新 潟 小 原 甲 陵 春 の 日 汽 關 車 の 白 い 蒸 氣 か な 移 り き て 子 ど も に 友 だ ち も 出 來 よ う 山 吹 の 花 庭 は 掃 い て 雨 は れ た 畠 の 花 び ら つ つ じ 山 吹 夕 餉 す ま して 明 る く て し ば ら く 福 岡 原 實

田 は ま だ 雪 が あ る 村 の 動 力 が 藁 打 つ て る 海 ち か い 田 の か も め と び か ふ 田 を 打 つ て る 愛 知 筒 井 頼 子 庭 は 掃 い て 雨 は れ た 畠 の 花 び ら つ つ じ 山 吹 夕 餉 す ま して 明 る く て し ば ら く 福 岡 原 實

道 は 草 に 混 り て 咲 く 花 の 林 を す ぎ て 湖 へ ゆ く この 菊 冬 も 赤 く 咲 く 疎 ぎ て 日 々 早 く 經 つ 弘 前 竹 内 竹 童 師 の 胸 像 に 赤 襷 か け ま る ら せ て 式 桃 の 蕾 菜 の 花 雨 明 る く 甘 く て し と し と 降 る 風 も 若 葉 の 兵 隊 が 通 る 祭 の 幕 が 家 な み

ど こ も 櫻 の こ こ か ら は 生 徒 の 畑 山 に も 櫻 り ん どの 花 月 夜 の 鶏 小 屋 は ね む つ て る 横 濱 新 納 香 樹 小 雨 の 中 の 細 か な 白 い 小 米 の 花 した たり

小 雨 の 中 の 細 か な 白 い 小 米 の 花 した たり

小 雨 の 中 の 細 か な 白 い 小 米 の 花 した たり

小 雨 の 中 の 細 か な 白 い 小 米 の 花 した たり

小 雨 の 中 の 細 か な 白 い 小 米 の 花 した たり

小 雨 の 中 の 細 か な 白 い 小 米 の 花 した たり

小 雨 の 中 の 細 か な 白 い 小 米 の 花 した たり

神戸 田中 井夢

小使さんはいつも同じ人で年とつて今年のさくら
晝月、俤で 麥の穂出てる
櫻の實、夫婦に子供をひとり貰つてくらし
春の星がある 山がそばにある 障子(訪詩外樓三)
山の櫻が咲けばといふこのへん屋根のせきれい
世の中のはなしこのへんのはなし櫻さいたはなし

東京 原 農 平

波、白いつばさ濡れさうに飛んで夏がくる
花を持つて来て病室は海に向いてる窓の春にて
花の下埃をあげて兵隊往くと沈む日の吹かれるばかり
花の上給水塔の見えてゐて豆腐しづませてある水
お煙草御下賜、若葉どきの一族誰彼れすこやかな

東京 岡野 宵火

海のやうなそらに鳥のやうな雲が、一機で
ゆふへ野に人のあるみえてなにかつち音などひびかする
観兵式御模様ラヂオにてひるしづかな病人として
あるいて蟲のからだのつやつやとおてんきの日がさし
をんなを傘に入れ松の花のさききつた雨

三重 親井 牽牛花

朝やけ濃ゆく 噴く水
ひかりひねもすひたむき拓く
一家 一兵 一望 麥 秋
うれ 麥もう刈るほどか雨の橋見える
つき夜のつきはないあさのつゆくさ
夕月にかげするいはほあらうみ

層雲壇 其二 井泉水選

東京 龜谷 庭草

着くと向ふの電車出て行く松が月夜のかげ
山の上にもこのごろはたけ月夜になる
たまさかの草原と云ひ風と云ひちかごろ東京のくらし
右は大學桐咲いて本郷通り若葉本屋の本
さくら咲き朝はさざなみ弟を神としてゐる(弟戦死)

濠北 新村 和也

浪に椰子の木に月の出となる馬車で
武運いのちあり落葉してくる
まだ月が沈まない家並と道とある
月が明るいやしの實をわする
日の照りの土に落ちとる

静岡 遠藤 源治

にはとり砂浴みてゐる木の蔭春ふかくさがり
かがやく星山をはなれて明けちかし山のすがた
芽ぶく林がひかる流れが風ふいてゐる
蜂がはたらく朝早くから雲は白くて

長野 栗田 白夢

木の芽の空に旗を、この日靖國に村のひとり
草の芽夜明の雪が静かにとけてゐる
雨、草の咲いてゐるをふる
こゝいら田の牛に工場消えのこる雪に雨ふり

千葉 關根ふさ子

不自由を常と思へば、家の櫻の木の櫻がこんなになくさん

尼崎 佐藤 龍

話すことのまだあるやうな營庭のたんぼぼはげませせば戦地からもはげまして来る便り日本青葉今晚暗い部屋のはらの一りん明るいそのまはりに坐り警報解除おひつくるくるくりやで洗つてゐる手につばきのはなあひるのゐる橋など渡り

愛媛 武田 桂

吹田 多胡比左志

馬が車ひいて通るので暮れた道が水田の中礫のやうな雀が寒く昏れてゆく窓麥畑の一つの灯が昏れるばかりの山青い芽赤い芽春の雨をぬれてゐる寂しさも哀しさも川は昏たてて流れてゐる

東京 日野 傳

廣島 菅 無極

朝がもう日なた日かげが茄子苗はいかが月の照るときかげるときの雲が柿の若葉青葉に午後の雲が出て港のうち白い船がゐる夕日の川向ひのさくらが雨上つた造船所で

宮城 傷療 土屋 曙子

東京 里井 正子

たたみに坐り皿のするめなどひさしぶりの父と櫻が咲けば蛙がなく面會です笑ひの中で高笑ひする慰問演藝春の雲春の白い雲が通る一團の看護婦が朝早い參道を通る

東京 伊東 光子

東京 印南 健二

家に赤兒があることも戦争であることも六月の雲蝶がヒラヒラするので小さな手の爪きつてやります少年竹刀もつて通るこの道藤の花夕日やはらかし

さくら初花一枝さげてゆく風 散る花の噴水 満開の母校の體操のころ 鶏が鶏を追ふ朝のちよつとした風景

長野 高橋 松二

雪のよごれもぬくく雪の上雨降る雪蟲

陶窯火鳴りして落ち梅梅の青葉

山かけて麥の穂月が照つたりかげつたり

東京 高橋 燕佛

遙けきかな島の緑もりあがり安着を知らせる

船にくだけゆく波の海の日の最中をゆく

またいつかはと家を出てけふ雨降つてゐる櫻

東京 松岡 蒼兒

朝の手洗水のうすら氷したるに山茶花の赤

疎林雪解ける朝日である

石に雪がある早春のさざなみなり

満洲 清水 たかを

陽春の候まこと陽春の夜手紙スラスラ書く

枝ぶりのよろしい松の下温かな小鳥来てゐる

ひさびさの雨でして馬が厩の中

福岡 武鑑 青杏子

柳ちよつと風があります面會にきてゐる風呂敷

妻よ 蠅叩きにもとまる 蠅で

煙突の影と芋を植ゑる少年工たち元氣

福島 下田 麥

にちにちたゝかひにちにちさいてちる

水にうつして咲いてゐる太鼓橋の反り

麥うれて来た二度目の兵となる頭を刈る

尼崎 林 葉柳子

寺 苔にふる雨の池にふる

春は 曙のつくばえの水

一日中の爆音のたんぼ夕べはつぼみ

備へあればの、青葉に藤の高々と咲き

つづじやら桐の花やら戦技走路といふ

自分に正直で青い茗莪のただそれでよいので

東京 折居 遙子

ひらひら白き翅してゆくに構内レール縦横

勤勞者ゆきかふ街の金魚およいで夏が來てゐる

ひらくばかりの鉢へ朝陽を、遠景本の芽時

一本の煙突の影が萌えてくる

東京 仁本 堅二

朝から照つて蟻が蟻のあとから出てくる

橋から道がわかれてゐるのを別れてゆく

東京 中村 正明

地下足袋はいて道のどこまでも萌えてゐる

松がゆれる屋根がゆれる池がゆれてゐる爆音がゆく

もどりてここも青葉して久しぶりの人ばかり

駐北支 清水 勇吉

さくら散るでもない奥さんたちの白いエプロン

しづこゝろなく散つてゐるふうな白い雲

新聞は南の事ばかり、こゝは杏咲いて暮れて着剣動哨

和歌山 梶本 蘆城

まいにち寝てゐて、おだまき草はコップで咲いた

泣いた目にみかんの花の雨ためてゐる

夕日、幼い兄弟で兎の草が籠に一ぱい

福井 小林 秀洋

はだし・で 草の月夜をあるく

西宮 竹内 孤明

大阪 梁瀬 阿羅興

廣島 門藤 康生

鐵の臭ほのかに、レールはまつすぐに春日和

岡山 赤松 甲庵

お宅の南瓜は大きくなりましたとラヂオ體操

福島 北本 俊光

花びらそろつてとんでくるわたし舟いつかはなれてゐる

岡山 赤松 甲庵

駐臺灣 根田 月子

東京 高橋 耕吉

兵隊さん送つて驛から長いレールと雪

岡山 赤松 甲庵

日ざし壁も乾いて桃の花池の水

岡山 赤松 甲庵

全快して君は此頃咲きはじめてサイネリヤで

岡山 赤松 甲庵

花曇りといつた空から山羊の乳もらつた壺で

岡山 赤松 甲庵

けふこそ敵機の來さうな風の雜草の花

岡山 赤松 甲庵

しみじみ會ひたいと思ひ雀枯枝にゆれてゐる

岡山 赤松 甲庵

糸瓜棚に南瓜が雨になつて暗くなる

岡山 赤松 甲庵

大分遠のいたらしい夕立のあとの柿のしづく

岡山 赤松 甲庵

ドイツ通信が空襲のことなど月のおそい晩

岡山 赤松 甲庵

句心、冬木に星が咲く

岡山 赤松 甲庵

寺町ひるどきは雨ふつてゐる塀のつばき

岡山 赤松 甲庵

蝶々合せた羽をひらきそのかげとび立つとする

岡山 赤松 甲庵

俳句、冬木に星が咲く

岡山 赤松 甲庵

大阪 菅崎 道雄

岡山 赤松 甲庵

句心、冬木に星が咲く

岡山 赤松 甲庵

寺町ひるどきは雨ふつてゐる塀のつばき

岡山 赤松 甲庵

蝶々合せた羽をひらきそのかげとび立つとする

訪ふて筍竹になる端邊にゐる
こぬか あめのあやめがある

雨あがると日の強く菜の花たけてゐる
また敬禮して兵隊さんすたすた街路樹木の芽

目をつむればあたゝかい山の上にある
八日は梅さく大詔朗誦する

船造る音が若葉となる山の山彦です
汽車がとまつて出てゆくだけの花のちる

柿がびつしり花つけてゐる傘が干せた
麥が黄ばんできてお天気すこし落ちた蝶々

青い空と麥の穂逢ひにゆく
楓に實がついて静かな針箱とものさし

軍樂隊續くく梅のさきつづく参道
疎開してきて月を通る雲の奥になるころ

お向ひ眼鏡屋明るい日の朝になる青葉
ネコの芽と松の芽鳥居があつて春が一ぱい

乾竿にかけて春雨しづくしてゐる

福井 桑原 愚村

福井 桑原 愚村

東京 浅野 智秋

海からあがつて海がふる土産店のオランダ船で

大連 二神布佐女

警報八つ手の葉揺れる爆音のけふもくもり
ブレパレーターに朝の縁をさて先生を待つ一時

宮城傷療 渡邊 仙峰

船のふえ雀は軒にきてくれてゐる
雨がゆきになるふねひとり旅にて

大阪 宇野 喬子

春のひる来てくれて白髪がふえても達者な母で
しじみの貝を吸つては再起近い君達この朝

岐阜 近藤 庭三

うすい月が出てからも花の散つてゐる
白い土蔵の夕日でころがしてゐるのは酒樽で

東京 瀧川 安彦

寸土にも、日があたり茄子の苗
常會から歸り夜にこでまりの花

南方 眞行寺 理

松林の向ふの松林夕日を入れる
田圃の蛙の聲家の人の聲一本道

駐〇〇 石川 新市

火焰樹の紅い花雨のふる日も
蟲の音が傾いた十字星と丘の線

愛知 杉本 幸一

午後の陽曇り監視所からの二三本で咲いてゐる
長い堤と軽い雲が動いてゐるほどな風です

福島 石田 松男

こまめに鉛筆を削つてゐた少年の君が無言の凱旋
千本松も遠くに春はメダカのごちでお晝にする

長野 栗田 千可志

たまさかの休みの瓦にも梧桐の芽にもふる雨
ひとり来ておもふことが水に散る風

東京 鈴木 水帆

いちにち外で働いてきた蔭膳のふきみそ
はなはだおたまじやくしがふる田の水あるく

大阪 佐藤 龍

種芋土間にならべてある燕きてゐる
丘の空の夏雲その方では鬨つてゐる

長野 八重田 保朗

誰かの靴あとが少し大股であるのを傘さしてゆく
思ふまいとして夕べしづかな窓の雨

北群 戸澤 正一

駐満 三國 魚干水

霧のさむさは子を亡くしてゐる
折つてきて猫柳を小さいお骨箱になつてゐる音子

海軍 臼居 一雄

小休止の青いひろい空で
きんな白い月がある苦力たちひる

駐満 竹谷 正規

野を遠く牛の鳴くかたち雨になる

大阪傷療 久野 朝行
ひつそり防空壕があるひとり耕してゐる

和歌山 御井 弓弦
植ゑてしまつて暑くなる

神戸 中島 義光
この旅館も寮舎になつて風が噴水のあたまでふいてゐる

千葉 安瀬 和夫
月がでてくる四角い窓を持ち夏を病んでゐる

岐阜 鈴木 綾子
牧場の草も咲いてゐる鳴いてゐる牛臥てゐる牛

藤澤 吉田 富雄
病室の前の花夜も明るくて

京城 廣保 麥穂
明日は下宿を移るとする芽ぶかり雨の音になる

廣島 野北 菊江
家のむきむきどの家にも春めく灯がある

大阪 中野 七谷
歩いて旅館の多い道そら豆など干してある

廣島 寺尾 冬松
けふも萬歳を叫び芽ぶく道その後私も

横濱 近藤 眞佐夫
湿度計と書見器の本と病室毎日青葉

尼崎 廣橋 清志
雑炊食堂の壁の文字がなんだか夏になつてゐる

三重 楠 卓子
小手毬こぼるるほどな雨となりて

東京 河田 惠
横顔と黄いろいチュウリップとタイプ打つ音

福岡 鈴木 敬藏
どの机でも字をかいてゐる習字の時間窓の春雲

開城 松村 龍雲
送つてもどる蛙が鳴く

熊本 高本 母子草
葉ざくらよちよち歩ける歩かせてゐる

千葉 長谷川 情泉
けふも送る樂隊その道豌豆の花

埼玉 瀧澤 流木
隣組菜園の茄子の花などけふは工場が休みの顔です

東京 作間 比露詩
暖くなるひと雨ひと雨のけふのその雨

横須賀 矢島 寒雄
この道青葉してやはり鐘が鳴つてゐる學校

大阪 谷 雨滴
風のと豆の花白く咲いてゐる

東京 鈴木 單衣女
プールの水かへてゐるこんな日もある

川崎 北田 乃木彦
空にちいさくとんぼがとんで空に

川崎 北田 小松夫
でんせんがゆれてゐるものもゆれてゐる

東京 三井 不二雄
そのたくましさ志願してはげしい夏をゐる

やなぎ芽をふき川の木の橋 福岡 水島彦太郎

火叩きとおたまじやくし二三匹の水槽と日曜 東京 成川子柳

峠のトンネル通り杉山の雪折れ杉 大阪 藤原豊

電線が青い丘へ、丘へ上れば見える町で 三重 龜井團太

雨が止んだ木の芽井戸端へ出てくる 東京 深田昭

薬屋の白い看板と貯水池工事のところを暑い日 大阪 勝田英之

監視哨と木蓮が白い月と 三重 伊達宗勝

こんなところにある春が散つてゐる 朝鮮 田中雨郎

郵便屋さんけふも歩いてくるてふてふ 栃木 鹽田正吾

また旅に出ることであばらの骨の一本二本暑いことで 静岡 木村無相

陽がさせば日除けして蘭がさいたので 臺灣 青木喜作

ひるから日のさし二重窓の外の裸木 駐新京 阿部傳

苦力の日よけ笠が草の丈午後の日を 駐泰 山内常意

面會に来てくれた百合の花まづ元氣になつたこと 三重傷療 上野 葎生

誰もゐなくてひまはりの花さいてゐる 駐滿 萩野 亂打

ぬくいランプがあつて森の銀治屋を聴いてゐる 駐滿 眞野 義武

あさ池に水がいつばい蘆の葉 大阪 松浪サワエ

朝はずしく障子の白さ家といふこと 横須賀 桐井 靖夫

てふてふ暑い電線があるばかりの空で 岡山 松本 鯛介

光りとかげと散つてゐる 熊本 藤美 和代

つばめが巢をつくりあげた郵便がくる 長野 酒井 健之

いつもの一軒灯が見えて薬打つ音で 秋田 菅原 裸歩

蒔いたところに南瓜の芽が出たせかせか出てゆく 長崎 吉田 文彌

来てみぎもひだりも葎ばかりよしきり 東京 水谷 清照

公園の南瓜の蔓がたくましい公園のどこも青い 大阪 根来フミ子

菜莢がいつばい熟れてゐるのをお宮の裏詣る 山口 大中 青塔子

夕日のまつかさ拾へるだけは目籠のまつかさ
岐阜 肥田 興 顯

土俵があつて學校の櫻さいてゐる
神戸 高柳 登 一

晴れた日は海が見える堤の草を看護婦さん
神奈川 牧山 一 市

栗の花曇ると雨蛙ないてゐる
岐阜 間宮 折鶴子

ふと爆音のとだえるときもある、さくら
平壤 山田 幸 雄

けふは配給のキヤベツがある戻つて薪割つてゐる
三重 中川 保

林をぬけると月が明るい一本ばし
京都 内藤 英 夫

工事場の苦力たち柳はめぶいてゐる
蒙疆 前田 零 堂

ふと道の青む草など近頃疎開のこと
東京 栗澤 淡 々

どこにも防空壕にも青い菜っぱ暑くなる
東京 安田 爐 中 火

さくら冬木つづき幼い同志唱うてゆく
福井 助田 小 芳

菊菜の間引きも乏しきに耐えてゐる
京都 高橋 又 兵 衛

登りつめて遠くの村近くの町春である
福島 高田 照 井

陸 集

市禪子選

青葉窓からの六月の日射し防空おこたるまい
東京 富摩 キン

警報の眞剣な一ト夜の明けて團員の腫
東京 星野 ふみ

まづ解除の頭巾のまま夕べ母と子と
東京 濱中 千代子

淋しと書かぬ戦地の手紙讀む麥穂の中
東京 藤波 きみ

月夜の麥のナルコは子に持たせ引かし
東京 江川 フク

しぐれ雨のどの家もともりて海なくあゆむ
東京 横山 千代江

わが少しの裏畑のタトマトいつくしむ
東京 岡村 正 江

叔父さんは二度目を征き壁の鐵かぶとある
東京 萩原 アツ子

大きなトリスミだといふ夕べの落着き
みつば摘めば指先のかほり寂びしも

草にまるぶ小犬夏草の匂ひがする
東京 萩原 道子

お庭に豆が生つた蝸牛がぶえる

荒鷲になる子で風を上げる東京 久保田和磨

いつやみし雨か富士廠舎のはるけく東京 林 東雲

警報に月は皇土を照らす大君の御桶となる子等の職

東京 窪田 一真

南の友よ満月山の端を出でたり
頂の眞近に見え富士は夏野となり
牛が水を飲む野に月出で東京 大熊 敏治

軍神を生んだ故郷の山山みどり
銃後の建設に初夏の力を合せる
軍神につよく子あり職はためく東京 大屋 一馬

郭公が啼いてゐる行軍過ぎ行く
麥の穂旗のひらめく家をまはり東京 林 哲

晴の露置きあまる新緑となりぬ東京 大山 正浩

たゞならぬ國の歩み木銃持つ手震ふ
何を語り告ぐらし富士の星またたき東京 久保田 喜代子

麥を出て迷ひ來る蝶につよじ東京 夏島 茜

芋の露まるびつよ一つになりぬ
病葉一つ露持ちしまゝ落つ東京 南 琢麿

大神聞こしめせ我等が大地の氣魄
教卓に赤い花あり古事記を讀む東京 吹田 無名

奉仕團の旗なびきとんぼが飛ぶ
日の丸辨當をひらく清水のもと東京 中村 倉次

大内山とはに松のみどり花咲く東京 西田省一郎

椰子の木の日章旗土人の子東京 中村 倉次

花片落ち緋鯉の腹透いて見える東京 堀内 春泥

湯がべり思ふものに天の川がある
赤いボールを立てる青草と春風に東京 堀内 春泥

爆音六月の晝うす曇るなり東京 古賀謙二郎

生かされてゐる身の青空の雲を追ひ
腰の鎌が似合ふといふ親爺と工事場へ行く東京 内田 克子

捷報の夏はじめ東京 野口 養古

雨の日の肴屋で順番待つてる東京 内田 克子

東京 野口 養古

東京 内田 克子

どんより曇つて空の氣球を見てゐる

東京 内海 照子

まつびる南瓜の蔓の間から子供がのぞく
警報やつと解け青いきやべつ持てくる
子の食慾がさかんでこんな涼しい朝の太陽

東京 湖 光子

夏の小さい肌着も揃へ五ツ年のみごもり
これが生れ出づるうごめき身内をめぐる
この白い産衣の胎動ちつと聴いてる

東京 余郷 富一

灼け草の匂ひ寄る目と耳とギツチョコのなき

山形 渡邊 白市

南地への夢いく度もいく度も椰子の繪を描く

田征 中山 一路

望み若き血の雲あり海遠く

田征 泉 東三

波千里御旗高く掲げ押す船脚そらへ
馬のほひに寄添ひ喰うべ耐行難路の雪
大陸の月の下での吾影長し二拾四時二分前
傷兵の安けさもあはれで日射し來る庭木々

東京 伊藤 秀雄

白衣吾に參道が嶮しくて薄雪
鋸も鈍もむきむき使ひ分けて樵る初等科生で

東京 鹿島 定雄

夏木風あり警報の中の石の地藏様
赤兒良く泣き警報の母が風に立ち

東京 鹿島 定雄

非常米をかしぎ置き朝から梅雨空の陽を感じず
夕ばへの眸を遠く富士に暴音を聞く

東京 古村 かの

勤勞歸りて聲を限り歌へば夕風の音
お月夜垣の間より勤勞のベケツを持てり

東京 廣井 義秋

夏草に動かんとする照空一線に星座つらぬき
驛の聲の入營旗なびかせ學徒隊あゆめり

名古屋 伊藤 濤波

満天の星に人々うごいて田に水が來た
戰捷待つて待つて一村麥秋を向へり

三重 河合 英観

應石近し

今年限りの田麥刈り伏せ畦に立つ男
わが村五十石いつせいにヒマの種まきぬ
この決戰の學童の南瓜夏豆の葉立よし

樺太 友定 白鷺

若葉埋めきつて残るはジャンプ臺
郭公啼きつゞく新緑の明るさに日記

南海 酒井 吟浪

兵隊さんぐみたべるとぐみ取つてくれる子
出撃出撃あだうたん青葉日に輝き

吾子よう笑ひ抱いてくれて若葉の灯

上海 里見 正義

門出の酒なみくとうりけてわれ征く

上海 五十嵐 飛天樓

別れても此處の舊正の銅鑼太鼓忘れめや

上海 浦田 次郎

いたく錆びたる錨一つ冬ざれてゐる

上海 高木 凡平

蘇台の冬日はかなし敷しれぬ群鴉

在南海 中原 政平

夜半に落つる木の葉に目覺る時ありて

四日市 山田 勝月

アツ東條首相だ後ろ姿が宇治橋渡る

東京 岩館 テル子

徵募のピラに立つてゐた少年が燕の快翹をぢつと

空地の菜葉これもたべられる少しを抜く

ことし農園のおかげで早起平氣な私

大阪 岡田 吐月峯

戦は近きにあり今朝も巻脚絆締めて出る

京都 町田 三葉

配給の甘藷籠兩手にさげて妻も老いた

西宮 奥田 我木香

溜飲下げると戦果その夜家々朗色(明治節前後)

小田原 葛本 小夜子

踊の小道具いろくあつて慰問の稽古はじまる

小道具の中の藤の枝持つてひとり立ち

巨いなる日の出四國山脈息吹くなか

東京 山口 健介

船から鑽石揚るまたあげる起重機

麥畑の日の出そんな私の朝夕

雨あがる馬鈴薯畑の妻こつち向く

岩國 松金 指月堂

壕のまはり陽ざしよく茄子の花咲き

長野 中村 久重

鬼機待つ地帯五千石どこまでも青葉

防空綽々雨夜の味 噲玉のほひ

人を交へぬ雨夜の茶碗の茶冷えた(教員戦死)

汗かはくまでの身軀寝てゐる這松にほふ(挺身隊)

年寄とて時局の様相見過こされず何かな働く

臺北 坂元 呑空

子の出征を餞けて

人におくれをとるなくさの庭のつとめおこたるな

おからだを大切にわたしが凱旋を待ち賜へと繰りかへす

神戸 小川 目高子

六月の樹の葉ゆるがし飛んでゆく二機

つゝじ藤花の下兵らも夏蜜柑むく

庭におりて白き杜若の蕾なるを剪る(なき父)

福岡 南 畝 三 坡

潜艦甲板に拾ひめい／＼飛魚ベケツに一ぱい

掘溜め蚯蚓匍ひ出し空ラの竹筒魚釣り返上

勤めから歸つた夫に見せまいと病んだ眼に力

朝鮮 藤 下 ふ さ

摘みたての菜つばにほふ味噌汁たがひにすゝり

福岡 高 取 芳 春

つつじも雨に落ち果てて微熱出る午後

微熱吹飛べ大空へ手作りの鯉のぼり

若草の池も高地もなつかしく再起の演習
再起の銃に汗ばむ青麥の穂が續き

東京 飯島 郁歩

吾子と同じ子がゐて召されてゐる若葉
萬歳それから蛙のこゑのしづかなる闇
蛙とときをりは聞え夜勤の机
雷鳴の險しい空受けて防火用水
桐がしきりに花こぼしてゐて公共待避所

東京 渡邊 如蘭

榨若葉になる揮發の匂いつか體臭となり
煙たくましく若葉の日まづ煙突に射してくる

中支 深澤 夜舟

穂麥のはるか日の丸が銃聲とだへた斬壕
敵影失せてものたりぬ穂麥風の峠
銃聲やんだ穂麥の家々良民歸り來る
戦友の髭素晴らしい銃聲とだへた麥風

東京 古川 直右

提督の散華燃ゆる鬪魂つつじに秘め
太い神經になつて種蒔く仕事
なかぬ鳥とゐて田圃耕してゐる

東京 小川 一灯

梅雨の壁に凭れ診察を待つ同じ姿の
青葉に染まりもの讀んでゐるひとよ
菖蒲田の菖蒲のなか青空のぞく水がある

東京 清水 智恵子

警報下机の上の花菖蒲が開ききつてゐる

入營の旗の列ねぎの花が白い
東京 渡邊まき子

思ひ出の白雲だ洗濯綱を引つばる
たこが釣れる海を知つてゝ啞が沖を見つめる
山形 會田 保男

割當を完納すべく田植が弾む
東京 高内千代子

裏に入ッ手つやくしてゐる日光まうけ
爆音轟く電休で靜かな鐵工場の上
東京 吉沼 晴徳

夜空あまりにも冷たい喪の報せに(弟戦死)
血族が散つた此の腹の叫びを聞け
古い血が淨化するわが血族をたゞへよ

死んでくれたと父の顔我が父の御顔
大きな呼吸壁にぶつかつて沈黙
群馬 佐藤 厚吉

出發 燕白線となりて驟る
檜皮新しく嚴しきかも風の嫩葉
落伍せざりし力葉櫻の夢の如し

東京 標 靜淵

筍の毛に頬ずりするおもひをさなく
髯それば青葉にそまりさうほけした顔
芍薬のにはふかげに日々病やしなふ
満開の躑躅に立つ父や老いまされり
たゞきの上の蜷黒びかりして口をあける

出征 倉持 茂

皆んな元氣でな營門に花びら一つ
きつと便りをくれと念をおされ若葉が映る
朝點呼の號音太陽がまばゆい頃になる
射撃五分前汗が火炮にしみる

東京 吉池 良子

オリオン監視所の眞北にきらめく大晦日の私ごと
爆音やがて遠退く元旦の床に誓ふこと

弟再度應召

今日の門出の曉の星祈りの心になる
夜途の思ひ半月にさへぎられる

花巻 照井 稗人

敵心禁煙しましたさくらの花
皇國のかしこさ月夜の麥穂しづかだ
犇々皇國のかしこさよ青葉と郭公
岩手は山國の山の木決戦へ決戦へ
つゝじ燃えに燃えけふも征つ兵の鬨魂

久留米 神保 五瀬

春雷ボケの花咲き病室の友はねむり

出征 田中 伸

風を吸ひ込んだ坂だ行軍は汗を吐く
汗を吸ふ蟬の聲も松風に遠い
白い兵舎が夕陽俺は馬から降りる

名古屋 北原 胡淑

噫古賀元帥

星も山も街も更け眼ぎりつと夜行車ゆく

その夜工員電車こゑない睨んでる顔
ユダヤの賊め蹴つて碎くべし鐵がたぎる職場

青森 鎌田 露山

歸る飛行機夕べ棒イち手を振つてゐし
奉戴日けふ小さき湖ながら飛沫巖打つを

濱松 久野 仙雨

里をあげ若葉盛り上つてる征つて来るぞと
佛とは如是蓮の花或るひとときの見飽かずも

陸風集

新潟 稻垣 一鳴

六日夜や蒸す妙に波立たね(祖父の日)
けふ雲間日となりぬ海への入日見てゐ
旅のひととイ濱えんどうの花きのふけふ
鼻ざき防風のつよいふとむかしきた海
大愚神輿渡御の衆春たたかふ

上海 大島 蓓花

電車へ一列を作りオーバーの衿にも氷雨
妻が進んで一針足を止る千人針

千葉 淡路 呼潮

兎に角大きくならうと思ひ畑の南瓜を見てゐる

東京 服部 竹映

清淨な朝の大氣に地震を感じ戦果を感ずる
戦火身近かにして夜長を何事もなく寝る

北の南の戦果の話あまた星のきらめき
岡山 原田 垂穂 牛つないでおく辛夷の花水にうつりゆぶぐも
岐阜 原 丈 鳳

この鍬ひかり御國の秋いづこの秋もひかり
東京 箕輪 十三 雙 靖國に神鎮ましますなごやかな日の葉さくらが煽つ
子煩惱の墨書墨のいろをわか葉明りする
みいくさすすめます日降り明りの月の出山端

さくら蛟といふしづかにくる肌の田打疲れに
山形 すゞきゆきひと 疎開者と語る決戦下風のある畑
福島 濱 名 白 香

田植うわれらに産業列車とどろき過ぐ朝
こゝにも戦争はある山かげの田植歌 除草器の柄六尺はある構えて見るも
春曉のひかりつめたき鍬を愛撫す ことにことし早少女手元の捌き生きてゐる

早曉の土のしめり白いはなびらを鋤く
浦和 山木 六合 奥杉むら里さまのひるほとゝぎす
諏訪 今井 黙 天

木々伐られ隣村にひよつこり格納庫
若葉ゆさぶる樹上の子等に日がある 桐立ち房の香づらなに白雉飼ひてあり
奥ものさび夏花散りつゝ日の無憂(青崩峠)

米櫃の底にふれる僅かな米の尊さ
人の去つたかちの草へすわる 秘めに小手ざしいまをむかしの山男(辰の戸)

報道の正確さに應ふ麥の芽
名古屋 伴野 龍 朝げ山みち晩麥のすだち露けくて
大阪 英 吉 更

國旗かついでいく雪ふりふりくる
岩手 加賀谷 灰人 晝夜鎚響く工場の門の夾竹桃に出入する
隣組の女たち話してゐる南瓜胡瓜の黄な花の中

英靈母の懷に還りたまふ山が暗れて
伐り出してゆく雑木の空がひろうなる 疎開の積み荷日毎解く豆の花盛り
むこむすめへの家に歸り行く隴夜の人となる

夕焼と山焼く火とを見て歸る
ふるさとの雪のあるまゝの春の山 陽は昇りぬ馬鈴薯の花ゆるゝ新工場
三條 大橋 鏡 作

療養所の旗が遠い海かぜのいろにはためく
朝人ともひ城址のみちが夏になる雨 君ら防空日の足もと確かと列なしてゆけ

扉に木の影が夜の小路のとある家
供木の切株静かなる豆蒔きて

皇 土 天 照 らす 土 を 耕 す 岩 手 照 井 穉 人 夜 の 教 練 は 秋 の 蟲 の な か に ゐ て 東 京 濱 中 キ ミ 子

三田君戦死

みたまかしこしさくら咲く空はしづかな 臺灣 坂 元 吞 空 風 の 風 に お は れ て た ふ る 稻 穂 稻 田 あ る と 所 東 京 横 山 千 代 江

石ならべある狭庭ひとかたまりのつはぶきの花

空は青い拍手の音さうして人々歩く(榎原神宮) 名古屋 鈴木梅宇人 兵 隊 さ ん の 頬 白 い 窓 の か ん ご ふ さ ん 東 京 堀 之 内 し き

暮れ残るあせにまみれた乙女等増産のことも

星の下で稲のむしがとまるいなごとのる 東京 星 野 ふ み 出 征 中 裏 の 稻 穂 が 黄 色 に 兄 様 少 し 肥 東 京 横 山 あ い

稲の出稲の召され行くますらをの言葉

百姓の汗も勞苦も黄色の波の稻穂で 東京 藤 波 き ん い な ご 焼 く に か ま も ち て 稻 刈 り し こ と な き 身 東 京 横 山 ゆ き

刈田の男の子の手にはグライダー持てり

風に落つ木の葉の富士の山々に明ける 東京 元 木 サ ダ 野 良 歸 り 月 に む か へ ら れ る 重 き は 稻 穂 東 京 大 熊 光 子

晝は稻穂の音すやしき外の稻穂の色

月がお祭りにあかりひとつない夜の通り 東京 江 川 フ ク ふ じ を 秋 め く 生 命 線 輝 く 稻 穂 の 中 終 日 東 京 横 山 た み

東京 藤波富美代

柿の木實もちて赤ちやんがらば車

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波富美代

東京 藤波 芳子

日おつる鎌をかついだ兄やわが妹のおもて

東京 江川 ゑき子

みのり目出度き稻の秋晴てるるみのり

東京 横田 すい

あけの草の色にとまつてゐたいなごの小供

大阪 大槻 實

玉碎の英魂に續かん心朝の凍土を踏み

横濱 櫛田 東谷

木の芽に息を吹きかける春だひとり

南へ草萌ゆ子供とゆく道あり

青島 佐藤 光子

櫻咲かむとすその下整然と掃かれ

何も言ふ事がない急救箱しつかと抱へ

山口 神保 五彌

鐵帽をかけて冬枯の木を眺める

四日市 伊勢 泗郎

世紀の門出十二月一日鷓も猛る(韓氏へ)

長野 中村 久重

詳報明日待ちがたき寒水ごくり飲みて

教へ兒戰死

うくる骨壺のかるさも棧道ふみしめる

泣くまい氣もちがむやみに爐の薪をくべる

三條 大脇 花炎子

一劍空に流れ犀川はただ枯葉が鳴つて

哈爾濱 鈴木 長司

たけりく潮擧手の禮葬さん手袋眞白ろ

學服脱いだ葬さんほがらか軍靴の音

出征中 赤星 竹嶺

軍服で氣付かない芙蓉を妻に示され

手作りの菓子をつたべた面會所の芙蓉

〇〇先發の戰友に

彈む心壓へ兼ねてゐる椰子の若芽に

スマトラ 高木 四郎

興亡をかけて曆の第一をむく

庭芝の露ひかるに元旦の遙拜

中支派 深澤 夜舟

南海の便り來るつららすつかりとけたポスト

スマトラ 武藤 大眞

空を正視する雨の煙むる野にわれら記念日(神兵)

山がむかひあふ神兵ここに天降る

戦ひの場のふとみなが星の流れ

スマトラ 西垣 碧禪洞

椰子の葉雨あり一日の夕化粧のよな

消燈月に見るわれの兵舎彼の兵舎

ねながらましま上への空のあり月のあり

東京 木下 稔

風捲いて行く手旗ガツシリと砂噛む(海兵團)

齒を洗つて暮すつぱりと月しづむ

私の釣床ゆれるまどろみの故郷

長野 御所窪けさじ

少年の空へのびる氣持わかる四月夕空今日も
春朝勤勞の歎ふる吾ら風ありて
土手に土筆あり山合の河は音たかく流れ

宮城療 谷口 矩良

連翹花咲き空地へ鍬打つて傷兵ら
乏しきに耐へる大地に草々芽ぶく
木立の影うつり池に睡蓮卷葉

宮城療 齋藤 達也

散兵思ふ再起作業の傷兵が麥の稜線
どこ迄も歩く一隊が過ぎみちの陽炎
手術前夜水仙の花と起きてゐる

岐阜 眞葛野 太郎

堆肥きりかへしてゐる梅咲いたを話す
椿野咲きしてゐる露の藁もえる
雨ふる音す青木の實あからひく

北部隊 大淵 青柴

鋪道ずつと來しこゝに落葉松芽ぶく
この野ふるさとのやう虎杖を噛み兵ら小休止
窓に枝々芽ぶく雨しろく顔にもしどく

青森 工藤 折葉

一人の兵を待つ夏めく雨の日の家の時計
夏來る陽ざし無電器の調度板明るく朝々
洛陽陥つ無電受けつゞける手に紙に若葉の影

宮城療 つちや 國男

君の肩越に見る梅の純白を愛す

一心一隊早春土木工事進捗

日の丸の藁屋あり征く男あり早春
雲ひくうごき梨棚花をそろへ
すこしの葦畠かぜふけば白い花

宮城療 村上 幸吉

草摘む草のほひ山の下が療養所
草摘の手先の冷え風吹くにひとり
農具あれこれのかたちを春日の日南

鳥根 逸見 孤舟

子雀親雀とんでわが屋根の日あたり廣し
微風窓邊を吹いて木蓮の窓
荷車引き行きしあとの陽炎小石など

島根 徳光 悟郎

戦意耕すに日暮れてしまふ畑々
かすんで杏の花もかすんで見える
陽さす窓邊花瓶一ぱいの桃の花

備前 二宮 香芽子

露にぬれて花を剪る紫あやめ
窓邊に藤蓑がからみそこからの春空
一つの窓に春空深い雀近く來て鳴く

岡山 二宮 秋歌樓

電灯あかり椿かたい芽もありて
机上百合を生けて夕べとなりし部屋
鎮守御社はこのみち麥熟れるいろ

東京 島田 啓生

家と家との間隔桐の花散りたり

羽後 高野 奇山樓

京城 浦 麥水

春朝籠のまへにて話す必勝の話

壕の土手大根が生え朝禮をすまし

葉櫻に風さわぐ眞晝應召のその姿

戦機を感じ伏ずに雲雀下り来る

辛夷の花終り小川の水ひかり農家

祈りもつこゝろ桃の花を見る雨の朝

秋田 高橋 安榮

宮城療 青木比哉 略

女人うにを採る潮がうごく

歸るものゝ言葉山に山吹が咲く

雷鳴るやうで人遠くを歩み

動かぬ雲その下流れる雲ありてさくら咲く

幟 たつ 向ふ潮 たかま

一つ二つ灯につく蟲などきてそれぞれに起きてゐる

岡山 南洲 多美子

羽後 大野 銀兵

五月朝畦道の草が足にふれて

梅雨寒く山裾の一村山裾の徑々

穂麥の中を通りぬけて歸つた子供

梅雨に入る家の細い縁側のあかり

愛知 大橋 万々夫

鳥根 高藤 芹村

白いすみれ山のみちせまかりし

植田の水ひかりそのまま暮るゝ道なり

あざみの花川に雨降りて

草中の露を採りこども二三人が連るゝ

會津 渡部 東迷路

備前 金子 北甫

早苗風になびき土香る田植酒

げんげ田日が暮れてわが家の速き

すゝめの雀立ちするこゝら畑になつてゐる

堤下のげんげ田にて憩ふ大水筒をさげし

東京 上木 彙葉

岡山 田邊 冬壺

友と並んであるく一筋堤ありて枯葦

夏夕子を膝にのせて食卓のまるく

小春日和といふ砂丘をおりてゆくは海女

はるかかの兵の顔思ふ麥刈るこの朝

東京 收 白蛾

佐渡 瀧浪 龍雄

燒野に雨ふり出した堂あかるくあり

山の彼方へ陽があがり春大きな歩み

馬鈴薯を植ゑし母と子とのせまき畑

畑ぬくもりなくまだつくく寒さ

備中 權田 逸仁

岩手 田代 白雲

韭青き畑 隅小雨ふりやまず

田を植ゑて夕べとなり生温るき水を飲む

一軒家の梨の花白し國旗立てゝある

おくれて登校の子に葉櫻の蔭うごきある

新潟 丸山 白水

船體にかげろふ立つ 工員の顔々

鐵扉開く男に明け大いなる朝

備前 佐藤 桂 四郎

海から草を吹く風が六月

揃つた麥穂を見る 鎌をかついで

東京 坂岸 桂 保

戦果更に續く月夜黙々と歸る

くるみ食ふその手が冷えるもの言はず

廣島 武村 好 郎

麥はのびたり麥はみどり空高し

針葉樹初夏の光その下の傷兵

羽後 和泉 鷺 人

筥一括り重さうにわが前に來し兒童

備前 近常 千代子

箒雲やはらげるあり若葉の山

小山 あり 學童來る日々青葉

滿洲 佐藤 弘

あたふか草に交る 茨のありて

備前 浪井 隆 之

轉轍機を返すなど汗ばみてあり

津山 杉山 まさし

朝から鳶は高く舞ひて卯月の野

在鮮隊 山下 まこと

ポプラ若葉馬はくびをすり合へる

岡山 栗井 昭 夫

子供蟲を取り苗代のみどりの中に

新潟 八木 茶 凡

町の家々の屋根の光り冬の夜

海紅近作鈔

秋田 相澤 華 芳

皇土子ら育ち葱畑に子とゐる

枯萱へ火を放ち一方春菜の島

あをく 鯨船へみな潮

つぎく 鯨揚げる船と船との間隔

鯨船の船員にますぐに見えてゐる灣内

諏訪 山田 蒲 公英

兵として發つ少年に夏到る山あり

こゝろありちいさな香盒が一つ夏來る

畦を塗る近くにをるはだしのこども

刈芝匂ひを残し刈芝を負ふてゆく人

坂の上の空ひびきなし坂に草茂る

東京 吉川 金 次

友情をかんにじるとらの芽がふとい

草に水が溢れまことふるさとと思ふ薊の花

吾子が命を託す氣持著莪花ある病院の庭

吾子の腹から出た數の腎臟結石が初夏の日

薄暑の日まづ本をつめる大きな箱買ふた(疎開、

中支隊 富岡のぼる

三寒 四温山のひとゝころくろく松林

草を摘むししみ土のくろきに草の花ある

春空が大きい鴨の一聯遠くとびて去り

春野道ますぐあり儼然日本の兵が征く

肅々霧青くふるに大陸の地の厚し

東京 星野 武夫

もう襟巻をしない朝の日さす太い煙突を見あぐ

工女ら飲む湯をくみて廊下に雪のふきこみ

生えたばかりの蓬をふみ遠い山の見え

交替の人に機械を託し夜みち若草の感觸

手に摘みため風ふけば手からとぼれる蓬

秋田 三國屋 白省

凡俗こぶしをみてゐて食べるものたべ足り

一夜一夜橡の芽さかんなるを知るべし

空が青くてゑんどろのびて大みいくさ

船に鯨しらく夜あけてくる

一燈 一燈消燈一燈のもと水盤さくら

東京 林 鷺水城

仔牛と朝の日ざしたんぼ

そして咲き冷ゆる花菜田の水

べんく草おとるへず土くろき土

麥うすみどりせら流れに納得す

めしが煮えるにて木の青葉お日さま

秋田 木内 柳 陀

霜除けの庭と庭石ひがしからの陽

草が萌ゆ水見えて日の暮る

幾分日がのびる足袋はく

椿霜にあり哨兵の口ものを言はず

露の臺いつまでも青し地のすめり

京都 西山 刀耕

山雲動かざる生甲斐を辛夷咲きしところ

やま木ありておもふ石南花咲きしところ

土の祖神とし今に糶をしづめ残照

干菜も喰ひすゝみ鞍馬やま雪残りあるさうな

蔭るがゆゑわさび太る花咲く路傍のどろ

東京 今井 六石

米をさしに抜く少し春夜天井から紐たれし灯火

木々緑井戸あり瘦軀私付つ朝

一日青草を踏んで來し臉ふしどに入りてとぢ

梅雨に背低い彼枝のずつと垂れた檜葉をめぐり來

病みて一つ二つ桑の實をおく白紙

羽後 杉村 木々人

雪汁どことなく流れる野の七兵衛一家

新造木船何艘あるべ海どつちにあるべ風ふき

春二三日が曇天けふ歸宅する旅先

山燒の火の遠い宵月もうない

春夜々の安眠麻はとうに蒔いて

京都 松宮 磨 研

二尊院の方山櫻さく山の容を感じ

遅いさくら咲く雑木の中葦のなかほど

渡頭水澄み蘆の芽水の深さに
椿が咲いて椿の花佐久間象山の墓
雨ふる野の石と蕨とわらびたけたり

小田原 堀川 屈人

開墾石を動かしてもう一つ動かし春風
早天くらく土は柔かい野菜と我と
御國に働く此處に家があり葱坊主
この日夏空向ふの方が遠くふるさと
夏朝海の太陽線の太い浪ぎは

東京 竜田 眞魚

麥青し工場青し四五人伍を組んで挺身隊少女
物量の中に入る氣持麥畑にもそふて歩く(應徴)
嫁の話などあり夏夕早漬の菜を喰ふ
信仰のこゝろ麥刈る音つゞく日にて
箕がありそのやう菜をとつてしまつた夏空

東京 山崎 多加士

あねが弟が幼くて軒下に南瓜植ゑた
大きい屋根の下で働くみんなに五月來た
何もゑがかぬ寫生帖あるを桐の花咲く
こゝろもち單衣の肩あげて未だお召をうけず
木の茂り石のおもて風ふく墓のおもて

秋田 粟津 爽朗

夕べ潟の鑑みな動いてゐるを行く舟
青田除草 暇道みんな虎杖
潟口潮ながれる蓬を踏み
一日かつこうが鳴くこゝに祈る北方の兵らを

蕨が干してある家に風ふいて潟面
京都 川島 南海城

地に麥生え地に小馬も少女もぬれる雨
子供は芹とつてゐる單衣着てゐる山の雲
山が暮れる家が暮れる畑に人がゐる麥の穂
父があり子があるを想ふ藤の葉に風が無い朝
こゝに水尊し桐の木に芽が出る我家

栃木 黒丸 古生

水仙の芽が大きく空護る人と語り
球根掘る芽の黄いろ赤いろ雨降り
春雪ふりぐる疎開の人と離れたち歩く
菜の花咲く窓あかろい新居に移り
河鹿をきく夕食あとあかるさありて

東京 沼 文生

麥秋の兵舎にひろくこれほどの菜園
青蘆に風があり沼の水動かさず
舟を漕ぐ人達に堤が遠く青草の原
雀が山つゞの葉を動かすけふは一羽
我に沼なかばかげり河骨未ださかず

札幌 近藤 紫村

山見えて 鯁曇さらず二三日
村人靜かに動き鯁のもつと濡れてゐる
鯁水揚げす且 渚の砂冷ゆ
鯁おほむね完 熟水温たぬしき日
南無觀世音菩薩葉ざくら幹冷ゆる

尾崎 林 さあを

泥足で飯食ふ崖に竹の葉ちるを
竹の葉ちれるをゆくをよこにて巖に朝日さし
うしほうごく春朝一つの巖の蟻
ながれ散りこゆる竹の葉しろし音なく
麥の穂のたつた冷ゆる蓑をつける

濱松 口田 朴也

黙々土をぬらし春の水汲む
残りの雪の山が明け登らう道
岸を岸を洗ふ水瀬の音を聞く
木立風を孕む指に蓬の匂ひ一日
潮騒に住ひ代田既に掻く女

愛媛 菅 木葉

麥野のひろさ立木のもとの一つの石碑
ずつと浚へた溝土置かれ草の花さく
山吹の花咲き盛り日あたる崖を仰ぎ
つじ赤々蟬鳴く山の木のたかさ
竹藪葉ずれの音たて春日地に洩れ

岡山 笠原 大能 露

麥秋はじまつた山畑あり部落あり
男と男が笑ふ桐の木花咲き
アマリ、スの花のおとろへ家にをり男の子
佛手柑の花べらんだに何も置かない
青豆煮て母とそして六人の家族

諏訪 藤 森 澤 瀧

敵機近しわが前に咲いで櫻草
ふるいもひきをはきすこしつめたい田の水

みちの大葉子花をもつ働いてゐる老人
仕事に追はるゝやう青い桑畑へはいる女
草木瓜の實ちいさし今日も石を切る男

新潟 佐藤 豁 山人

雲の光りみちべ榛並木雄花ゆれ
苔青く茅葺の屋根を竹の秋国旗立ち
軒高く小蟲むれて飛ぶ石榴の芽が遅い
蓬群落のみちべ野火こゝにとまり

東京 後藤 零 丁子

列車すぎることの驛に立ち露ふかい春朝
梅さくこの寺に入り人たち外套をぬぐ
客來ることの部屋にて沈丁の花にほふに
椿咲いた母と子のくらし地に委をまく

和泉 牧野 秋風 嶺

あたり雪深からず山河青きたゝずまひ
衣川の關は雪ばかり穂枯草はうごく
佛手柑三つの實かたち同じからずいろづく
山に乾いた地がありころく椎の實

京都 泉 大 畹

鍬洗ふ妻の防火頭巾の黒い頭巾
雲間もる陽の麥青し少し菜種の花
虎杖ずつと伸びて御山入口の崖
祈る心に木の葉動かない一日の淺春

北海道 秋元 櫻 水

芹生ふる國の水清う若人みな兵士
山野春光こゝに晝餉す麓のけしき

これは漆の木實を垂れて雨に降らるゝ
沙地にしかと大船よせて島の春吹く風

長野 半田 雨衣

戦おもふ菜の花とおぼし黄な
茄子苗を植ゑるに森に来て郭公
空と山と夕べの麥の中をもどる
朝の田圃の麥の中の黄色い大麥

備中 瀬尾 一風子

みちをまがり苗代冷ゆる
お蠶を養ひわれに父母兩方あり
麥を刈る土かわきみちかわき
甘藷苗植ゑるが日が照り出した

秋田 伊藤 碧洋

まんさくの芽黄ぶくれ日々山の薄雪
はんの木まばらに立つ木二月水の邊
苗床に濕りをくれる瓜はふ厚な二葉
木蘭半ば咲き疎開の人々來り

岡山 山本 光王

春朝薄暗い機械のあひだをはいつてくる少年工
勝ちぬかんわれら芹汁をすゝる
人とゐてばらく楠の實のおちる樹の下
少年工がをる寮の前の穂麥深く

山本元帥の油繪を某官廠より受く

枇杷の新芽に雨が降つてゐる
寡黙元帥の胸像

濱松 永井 はるを

麥の穂そら豆の花風にふかれるる

梨の木より低く桃の木桃の花さき
新樹の息吹せまるやう道を來し兵一隊
新樹の空へ放つがごとく唱ふ軍歌を兵ら

諏訪 宮坂 岱風

掘上げた土の匂ひ葱苗を植ゑる
臺所暗ければありて芽獨活の一束
人不在座敷の一爐夏めき
みんなな石に休むに咲いて居る山藤

名古屋 加々美 絹子

地をふみ立つわれらなづな實となつてゐる
顔にふりかゝる雨こぶしの花乏しく咲いて
たんぼゝの花をこのみちを去りゆきしこども
竹の葉ちつてくる防空壕の水汲むわれら

秋田 佐藤 禾黄

子供がをり花菜の中から出たこどもの顔
山火つゞくけふもけむりわれらにあるいのち
農民ら朝からの暖か雨になるを知つてゐる
二三軒雪圍ひときて棲み山のこのあたり日の出る

愛知 黒部 雑谷

風を來し乙鳥この家控へて
茅花の穂向ふの山日のあたり
山百合の花なりそれは鳥のとぶ青空
田螺の黒いいろひとり酒を離れぬ

在佛印 梶田 羊介

火焰木は木に満つる花赤き花湖に落つるか
鳥が澤山コーヒー樹林のなか道路は黒い眼鏡を要す

安南の夜こんな晴れたり遠き家に山榎子咲くか

安南婦人茶會

女語らひあへる花の窓を開きもすハノイの夜

鹿兒島 遠矢 瀉 丘

蝦夷菊 花 咲くに啼いて子鴉

麥刈 花 咲く 花 白く

空の彼方黒煙あがり南瓜花咲きたり

金盞花 咲きつゝのる朝の雨に起ち(甥戦死)

東京 坪田洋吉郎

畑に馬鈴薯芽生え薪で炊ぐ日々

庭いつばいに若葉し供出の櫛空見ゆる

夏めく宵の娘が料りしといふ菜など一皿

大月の空いづこも晴れ足の爪をつみある

岡山 中塚太々夫

いつも来る家のいつものところの雪の下

潑々水の光るへばらの枝を入れる

あかき花あをき葉ばらの木動かず

萱霞草へ五月の窓あけてやる

北京 深尾けん艸

悼青燈氏母堂

空 圓 満 一 つ う か ぶ 春の雲

母の喪にありて、三句

雲あし雨となり連翹地に咲き

楡の若葉がのびることにも母在まし

海棠花薄く春宵なにかまたるゝおもひ

長野 小林満巨斗

雪ふる木の下に立ちて神兵一人

われら決戦のかまへすこしの麥が穂を出す

春の雨ふる河原石のあり山よりくもり

この宮寒きに辛夷さく學童と箒うごかす

麥の秋雲のうごきつゝつよい足どり

大阪 淺野 麗木

このやう沈み潮の中のいはほ夏めく日

祈るきもち夫人にうつくしき楓の芽立ち

うしほのひゞき男に草ふかくなるところの徑

人を偶ぶ野のくもり杉葉長けしに

桃ちつてしまつた蟲の土にまみれ來し男

句 蓆

□栃木觀音寺鍛鍊座

卯木まだ咲かない石切りしきつたての深く覗く

石々にほふ中とこるてん喰ふ人ら

夜が曉け小鳥諸音す高音が眞鶴

馬もよるこんで春の山を上り草屋根が觀音寺

麥青く廣し道あり牛のあゆむ

古きもの御佛體を拜しかつこう鳥啼くを

石切りくらす人のつくる豌豆花さいた

山に一ばい目があたりつゝじが咲き石を切る村

馬に乗る事をすゝめられ馬にのる薄暮の日ざし

木の芽はいまとりに行つたと云ふ厨にて聲す

首の太い犬が來て木の芽摘む娘達

六花 不句 羽双 市ろ 自休 しげる 寒骨 美雄 一碧樓 嫁ヶ君 古生

「俳句日本」の使命に就いて

米倉勇美

世界は今や正に大いなる二つの陣營に分れて相戦つてゐる。頽廢し墮落せる舊秩序を死守せんとするものと、清新にして潤達なる新秩序を創造し、蹶起せんとするものとの對立これである。歐洲大戰の繼續せらるゝこと既に五年、而して大東亞戰爭の勃發を見てより茲に二年有半、地球上に起りつゝある凡ゆる政治、經濟、軍事並に文化に關する一切の出來事は、實にこの新舊二つの相剋、矛盾、分裂に端を發して相闘つてゐると云つてよい。まことに全世界の水陸空を蔽ふ戰雲も、人類の大半が拂ひつゝある多くの犠牲も、總て皆この新たなる世界秩序の生れ生づる陣痛の惱みに外ならないのだ。

凡そ埤堦の熱度が高い程、鋼鐵の鍊成は完きを得ると云ふ。我らはこの意味に於て身にふりかゝる如何なる試煉をも、また如何なる陶冶をも敢て辭するものではない。凡ゆる苦惱に直面し、凡ゆる困苦に相偶し、凡ゆる艱難を克服して行くところに、歴史を創造し、新世界を開拓するものゝ悦びと強味とがある。

昭和十九年五月二十五日、我らは「陸」社同人諸君の「再聲明」に依つて、苛烈悽愴な大決戦下に「俳句日本」の新生の産聲を聴いた。歴史は正に「眞に非定型俳壇を打つて一丸としたる唯一の統制ある俳

句雜誌」の創設を要求したのである。これは我らの多年の主張、宿願であつた。我らは新しいものゝ進む途、同志の共同進軍の喇叭が、今や文字通りに共同同心の鼓手に依つて吹奏せらるゝの欣びを共にする。

昭和十九年六月二十日、この日の大本營の發表を聴いて總身の血の沸り立たぬ國民は一人もなかつたであらう。敵米國は遂に我が統治領サイパン島に上陸、有史以來の大艦隊を以つて我に挑戦して來た。ガダルカナルの轉進以來血涙を吞んで隱忍自重して來た我が陸海空の精銳が、一億の憤怒を負つて起上つたのも亦宜なりである。

昔神武天皇は孔舎衛坂に苦戦し給ふや神祇を齊ひ、道を轉じて賊を平定し給ふたと聖く。神功皇后亦新羅御征討に方り住吉大神を祀つて舟師を進められ、元寇の役、龜山上皇は御身を以て國難に代らんと祈り給ひ、もつて神國を護持あらせられた。日清、日露の戰役亦然り。恐れ多くも聖上陛下に於かせられては決戦下御身親しく、伊勢大廟御親拜の歴史的有難き御儀を取行はせられた、重大なる外敵の難に會ふや、上の祈りに下隨ひ、神人合一、純一無雜、億兆一心唯だく至誠一念、神に祈り、神に齎き、不可能を可能とし神州不敗の神助を顯現する、まことに至誠神に通ぜざるは無いのが我が國體の本體である。千年の歴史まさに決せんとする秋、我らは眞にこの尊き皇國の傳承を全靈全魂を以つて相繼がなければならぬ。戦局は正に重大以上の重大、眞に言語に絶するものがある。前線には今や如何なる戦ひが行はれつゝあるか？ 國民よ、心耳を淨めて南海の潮音を聴け！ 此期我

ら俳壇人が如何に生き如何に在るべきか？ 我らの「俳句日本」の新發足は如何に正しく方向づけられねばならないか？ これはまことに今の我らの職域に於けると同様の重大事である。否より以上命にかゝはる、永き皇國の生命にかゝはる重大事である。

文章はつひに經國の大業と謂はれる。皇國未曾有の國難に際し、我ら俳壇人の任務はまことに重、眞に古を稽へ今を照らし、先づその心に宣戰の大詔を鏤刻して、國家總力戰態勢の原理と方策を見極はめなければならぬ。俳句の途亦實にこゝに係る。我らは一切の愚かなる過去を捨てなければならぬ。眞に正當なる、烈々として燃え上る新興生命、清新にして濶達なる世界新秩序を創造する義務を負ふ。動かぬ、捉はれたる定型の遊びを撃つて撃ち破らなければならぬ。三社統合、否定型合一、我らの陣營を貫く共同の戰意は、高く日本文化の高揚、世界文化史の内奥に通ずる新創造に進進しなければならぬ。これは單なる文字の遊戲、活字化等にあるのではない、身自ら感得する魂の叫び、我ら自らの皇國魂それ自身でなくてはならない。戰局は正に重大である。決戦中の決戦、まことに皇國隆替の超非常時、我らは斷乎と身自らを皇國の生命に擲げ打たなければならぬ。我らの生活はも早や我がものではない。日本即我、日常即非常時、この大自覺、大生命を心得充足するのが我らの道、新誌「俳句日本」の使命でなくてはならない。茲に確固不拔の國民信念に通ずる、いや導き昂揚せしむる我らの道がある。

——二、六〇四、六、二三——

非定型俳句の總蹶起に就いて

安齋櫻 礎子

與へられた題は非定型句の總蹶起といふのであるが、總蹶起は可とするも、吾々の句に非定型だの自由律だのといふ名稱を冠せられる事は、今日の吾々の良心から言つて餘り潔しとしない處である。それは、我々の新俳句は從來の自由律俳句の傳承ではないからである。今日の大時局下に於ける日本人としての感激を一句一句に謳はうとする場合、吾々のひたすらなる希ひは、一に與へられ表現される作品が優れた詩であり、優れた詩であるに適はしいリズムである事に存する。と云つたからとて、俳句否定の意味ではないのである。即ち、新しく生れる所の俳句文學の運動である。

さて新俳句は、其の表現に一切の自由を認めて生れたもので、俳諧を在來の意味での俳諧の域から脱脚して、これを眞正の詩たらしむべく生れたものである。それは元祿の芭蕉が、品位を與へても俳諧を萎縮させた貞徳の舊殼から、又た生彩を施しても野卑にして仕舞つた宗因の舊殼から脱却して、詩を生み出す心の源を探求して、其處に誠を發見し、其の詩の誠を基點として、更らに芭蕉自身の俳諧のあるいて行くべき方向を決定したと同様である。即ち貞徳や宗因やの俳諧よりも、もつと深いもつと嚴肅なもつと眞劍な、生命をかけたもの、永遠

不滅、無量過去から盡未來際に渡る大眞如海の表現を欲した芭蕉の迎つた道に等しく、又た久遠の宇宙と、それに包まれ抱かれた人世の眞の姿を捉へたもの、そして其の姿を純粹の光りによつて美しく現はさうとしたものに等しいのである。芭蕉は此の爲めに、自分が其の發展の途上に於て學んだいろ／＼な傳統や、さまざまな人世體驗やを攝取し選擇して、著しく自由な内容と標識とを形成して、今日の私達に此の道の新しみを勤むべき事を教へた。

私達の作句は、此の信念の下に議論よりも作句に、理屈よりも實作に、能ふ限りの獨自性を發揮して今日に到つたのである。しかもそれは創造の爲めの自由であり新しみであつて、創造を臺無しにする爲めの自由でも試みでもなかつた。即ちやむに止まれぬ必然の爲めに、私達は定型の傳統を揚棄し、季題趣味から脱却したのであつて、其處には俳壇人の多くが言ふ自由律俳句の如き詩としての絶對の無羈絆はあり得ないのである。非定型俳句三十年の研鑽の歴史を辿つて見ても、いかなる新しい自由な思想感情の表現にあつても、詩として調和と統一の原則から、又た國語そのその性質に信憑するといふ二つの條件を基本として、規律、統一、秩序、調和を含み、活動と必然との法則の中に發展して來たものが即ち吾々の俳句であつた。この私達の道を單なる自由律俳句と稱して怪まない俳壇人は、自由が一つの必然の中に存さない限り、それは眞の自由ではないといふ事を知らないからである。

此の意味に於て眞に價値ある現代の俳句は、最早定型非定型などと

云ふ外的韻律に拘泥せず、祖國日本人としての思想信念の上に燃え上る必然の感激を、必然のリズムによつて表現したものの外にはあり得ない。

學國一億一心、決戦體制下の私達の神經には、壯嚴で雄渾な視野が展開され、複雑極まる空爆、砲聲、工場の響きが聞えて居る。かうした驚異や熱情やの中にあつても、私達はそれを心の沃土として、たじろがず、昂らず、周到的確に把握しつゝ、自分々々の體驗内容を形づくる要素として、そして豊かな自由な創作精神の上に反映しなくてはならない。それは祖國日本人として句を想ふ場合、今日程、過去の舊殻をかなぐり捨て、天衣無縫の檜ノ木舞臺に登場し得る絶好の機會はないからである。

決戦下の俳句研究

秋山秋紅 蓼

みいくさは愈々苛烈になつて來た。この國家重大時期に際會し、我等俳句人として俳句を以つてお奉公するといふこと、それば云ふまでもなく現代の國家要請に應ずるところのものでなくてはならぬ。即ち我等の仕事が、徹底的にその目的に向つて一つの役割を持つことであつて、今更藝術のための藝術、俳句のための俳句といふやうな國家の現實から遊離した態度は全く許されないのである。隨つて俳句研究と

いふことも、勝ち抜くための目的に關聯して推進されなくてはならないのは勿論で、例へ一草一木を詠ずるにしても、或は戦争及戦時下生活を作句するにしても、その表現態度及び把握の仕方が、根本的に國家要請に合致するものでなくてはならぬ。

ここで、一般的に考へられ易いことは、戦争目的に参加するといふことと、俳句の本質的研究といふことを二元的に見るといふ態度であつて、これは、兩方面ともに不徹底の態度で、『戦争俳句は六ヶ敷い』などといふ言葉をよく聞くが、私は、別に戦争俳句といふ特別の俳句などある譯のものでないと思ふ。よし、その作品が戦争を素材にしたところが、その根本に於て、作句態度に不徹底のものがある限り、眞に戦意昂揚なり戦力増強なりのお役には立たないし心の底からの慰安にもならないと思ふ。

そこで、決戦下の俳句研究といふことであるが、まづ、所謂戦争俳句と云ふといへども、俳句の本質に根元しないものは、實際に効果が無いのは勿論で、如何なる場合でも俳句でなくてはならないといふことは、本質的でなくてはならないのと同様である。

だが、ここで、本質的であるとしても、その方向が國家至上目的に並行するものであつて、それが、民族意識の昂揚と共に熾烈なる日本精神の發揮に根基する事を意味するものでなくてはならない。即ち、皇室を中心とせる民族が生き抜くための生活に深く根を下ろしたもので、その場合に於て内容に對しての表現的態度に於て前述の如く、日本の見方及び把握の仕方を一層確立することが緊要である。それ

は、過去の日本文化の上に現はれてゐるところの、清き明るき直き精神の顯現であつて、更にその屬性とも云ふべき素朴、簡素、純潔等の性格は、たゞちに俳句精神の領域に入るとも云ふべきもので、芭蕉も風雅の道を説いて、西行の歌に於ける利久の茶に於ける精神と一致するものがあると云つてゐる通りである。で、この日本國土に育まれた俳句精神は、内奥的にこもり、る生命力的のもので、内と外との對立に於いては、内から統一するところのものである。それは、肇國的精神と合一するもので、常に活動的で弾力性を帶有してゐて、死灰のとき固定的のものではない。で、この活動的精神は、生命的抵抗性を持つことに依つて、自ら集約的に表現される型態を希求する性格を有するのである。

現下の俳句研究がなされるとするならば、ここに根基を置くことが何よりも緊要であつて、戦争俳句の外延的普遍性と俳句の本質研究の内包的全體性が一致し、具體性と普遍性とが並行し推進する事は、生命力的であることに依つてのみ正比例するのである。即ち、その場合は、横に廣いといふことは縦に深いといふことで、量と質とが飛躍して統一的に緊密化することである。故に、眞實は絶對であつて、一個の作品が生命的に息づいてゐる限り、常に心の火をたやさずに持續させることが出来るのである。

武士が戰場に於て、轡の音にも眼を覺すといふ心境は、この緊張の持續に依るものであるが、この緊張の次に來るところの弛緩性こそは、現下尤も恐るべき重要問題であつて、我等思想戦に参加する俳句人と

しては、戦力の資源的鑛區とも云ふべき、日本精神の根元的のもの
自らの持つ力の發揮に、點火の役目を果すことが主眼でなくてはなら
ない。

殊に、俳句の特殊性は、特殊の必然性を自覺することに於て絶對的
のもので、恰も我が國民性が世界唯一のものであるのに思ひ合せるこ
とが考へられることで、かゝる戰場生活にあつては、いよくその特
殊性を發揮して、定型、非定型を超越しての全俳句人が一致協力し、
現下の戦争に依つて我國の勝利を約束すべき大目的に向つて呼應し、
更に起成層圈的のもの必要を痛感して、先人が連歌から俳句を獨立

創始し遂に立派な藝術を完成したところの心を心として精進し、此際
總力を結集し日本民族の特性を極度に發揮し創造的叡智を傾倒し盡す
ことこそは、あらゆる部門に對する國家の要請であることく、我が俳
句の如き小さな藝術と云へども、今や眞に日本精神の傳統を現代に生
かしつゝこの決戦下にお奉公申上げ、同時にそれが將來に向つての史
上曾つてない俳句の飛躍的契機ともなるべき仕事をいたすことが、現
代の俳句人に課せられたる責務であると思ふ。

(一九、六、一〇、記)

一角より

井 泉 水

芭蕉が晩年、曲水に宛てた書簡の中に、當時の俳壇を見るに、俳人
には凡そ三種類の人があるといふことを書いたものがある。

風雅の道筋大かた世間三等に相見え申候。

といふ書き出しである。古來、是を「三等の文」と云つて、名高いも
のだから、事新しげに談すにも當らぬことであらうが、芭蕉の云ふ三
等、即ち三種類の人と云ふのは、第一には點取りを興ずることを専ら
とする全くの「あそび」の氣持の人。第二には、作ることが面白くて

作るが獨り樂しむといふ氣持だけであつて、勉強向上の氣持は更に無
い人。第三には、俳句を一つの道として勉める人、即ち名聞の爲では
なく、自分の魂のために勉強する人——此の三種である。芭蕉の口を
して云はしめると、第一の人は——

點取に晝夜を盡し、勝負をあらそひ、道を見ずして走り廻るものあ
り、彼等は風雅のうろたへものに似申候へども、點者の妻子腹をふ
くらかし、店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんにはまさりたる
べし。

である。風雅の道から云へば、うろたへ者だけれども、宗匠の生活を
資けてゐるものだから博奕風の勝負事の遊びをするよりもまだとい

ふのである。現今、定型俳句の大多數はやはり、此種の人である。點取りだの懸賞だのといふことは、今日は純舊派以外には流行しないけれども、雜誌の上で活字になることを得意として、自慢の鼻を較べあふことの他に意圖はない。現今の健全娛樂主義から云へば、不健全な娛樂にこけるよりも、たしかに結構ではあらうけれども、我々の志すところとは大分に隔たりがある。第二の人は、芭蕉の言葉を引くと——其身富貴にして、目に立つ慰みは世上を憚り、人事いはんにはしかじ、日夜二卷三卷點取り、勝ちたるもほこらず、負けたるもしひていからず、いざま一卷など又とりかゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし、事終て即點など興ずること、偏に少年のよみがるたに等し。されども料理をととのへ、酒を飽くまでにし、貧なるものをたすけ、點者を肥しむること、是亦道の建立の一筋なるべきか。

作ることが面白くて、むちやくちやに作る。現今は「二卷三卷」などといふ連句の巻といふことは甚稀であるが、やたらに句會をする心理が其である。句會の興味は、所謂「即點」であつて、其場で作品の是非をきめる。これは、勉強ともならうけれども、其中には多分の競技心理がある。又、さうした句會の詠草を發表したがる。自分で、自分の氣ままになる雜誌を出したがる。「其身富貴にして目に立つ慰みは世上を憚り」といふ類の人は、自費を投じて句集を出したりする。それも、一通りの研鑽勉強をしての上で、自身の一法としての句集ならばよいのだけれども、選者の厳しい批判を受けることは好まない。自分の思ふままに自分の作を披露したい、といふのだから、一種の「ひと

りよがり」である。現今、此の種の方は定型俳句の方にも相當多いのだらうけれども、我々内在律の中にも、案外に多數居るやうに思はれる。考へ様に依つては、斯様な人が居ればこそ、雜誌其他の出版がにぎはふのであつて、これも此道を世に弘める一助となるのではあらうけれども、我々の正しい道の爲に考へれば、甚だたより無き存在ではある。第三の人は、芭蕉の言に據ると——

志をつとめ情をなくさめ、あながち他の是非をとらず、これよりまことの道にも入るべき器なりなど、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入るやから、わづかに都鄙をかぞへて十の指をふさず、君も則この十の指たるべし。

斯ういふ心掛の人は、芭蕉門下篤實の作家が多い中にも、僅かに十人に足るまいと芭蕉が云ふ位である。現今、内在律俳句の道につらなる人は、概ね眞劍に勉強する求道士とは思はれるけれども、やはり本當の意味に於て此種の人は果して幾人あるであらうか。毎月、嚴密なる選を受けて勉強してゐる人にしたところで、其の雜誌に載る自分の句が、どの欄に載つたとか、今月は何句出たとか、といふ事を第一に問題にしてゐるやうな人は、此種の「第三の人」の中にははいらぬ。まして、辛い選をけふたがり、甘い選者につきたがるやうな人は、猶更、此「第三の人」ではありえないのである。

各家近什

兵庫 山田 宗作

天子在せり國青葉山の日おもて
雲夏めくいま家にお蠶あがるとき
たゝかふ地の石と石のかげり國の子
夏朝一の峰杉の秀がそろふ清淨
決意日一日あきらか御國青葉す

福岡 木村 縁平

日の落ちてから鴉、月の出てから飛行機かへる
梅咲く母の墓まであるいてゆけるとや(或病友に)
風が吹いてもあたたかい藪の前水音
からだは春にまかせておけば空が芽をふく
君の句になつた柿の芽、竹の子は繪になることか

結城 渡部 嫁ヶ君

代馬水から出て道の邊の草を喰ふ
草生えの土手暗渠の水瀧なして落つる
瀬音の中に葎切鳴くかと思ふ葎は若い
軍鶏の子首たてゝ追ふ蟲は麥藁蜻蛉
乳房に乳の溜る實が入つてゆく麥の畑

東京 安藤 北冠星

とほどほ爆音頭編隊の旗日晴れ
武藏野づら昔野づらの穂渺茫と
庭芝おこすおみな銃後の豆、南瓜

庭芝にますまして銃後の赤、黄花
女塾耕地とありなぞへ藪をかヂキタリス
愛知 池原魚眼洞

野火のほひに雨が落ちてきて道が雨になる
梅の高みから鳥歸りといった肩に鉄わが汽車通る
櫻どき櫻の話 框で新聞借りてゐる
とろるとろろ摺鉢の中の音のどろろ汁になる
蛙聞いてゐる風で妻の注射してきたつかれを家にもどり

東京 上原晃雨草

提督を悼む足速やのあが家みあかし灯り
提督の詞海相の言草蒲雨にじつときき
庭の畑なにかやかや蜥蜴に照りつづき
ひるは女ばかりの君征くに旗ふり
朝は朝の雲富士に湧き田植

名古屋 加々美青河

げんげ田の畦堅しゆくべくして歩く
つゝじ花白く我ら友達と寄りあへり
決意こゝを堅い麥の穂のこゝを征
一列葱の花日のありて咲きそろふ
春の大雨の菜畑そのほかの畑土手の下

下關 近木黎々火

豆の花と一羽の外るない蝶
木が群れて芽ぶいて芽の雲のやうな、村
日の昏れの壁が木の中にある
朝早い月夜から起きてゆく
残る日ざしに海の青い畑のみち

青森 柳田 流矢

櫻の芽の明るさ豫料練へ行きますと
芽ふいて雑木の奥の雑木にある道
疎開のお婆さんがひとりものでその梅さく
耳が遠くなるほどのあたたかさ土にある
大砲に袋かけて雨の日の兵隊さんと白い梅

東京 福島 一思

少女の二人は公孫樹へ歩み寄る公孫樹が夏樹
櫻若葉の道を喜んでゆくにコンクリートの塀があり
先生に連れられし子に地につぶじ咲きし
こん夜お茶いづくのむに感じ草の芽
櫻葉となれば夜となればわれに一つの机

秋田 佐々木 石々

あさひがさすと雪山鳴くとりけもの
雪山兎追ふ聲のたれかれしれる
四男鶏の毛むけて三男庖丁とげて多の日

長崎 松尾 敦之

道より低い家並防火水槽二ヶ月用波
月高くこどもはおやすみなさいの拍子木
港をでるとまだ荒れてゐるのみ水のひしやく

京都 風間 榮治 郎

波がひかつてながれてゐる櫻低し
五月山明らに一部隊がのぼる
供材こゝに集む山が青葉が押迫る
馬鈴薯の花に呼びかけたい土盛つてやる
野を見て廻るこのとき葱坊主に對す

四日市 原 鈴華

水仙活け端坐す征く少年航空兵
日々決戦す銃後野菊さき地に白く咲き
芭蕉二百五十年忌勤修
み堂ゆきやなぎを活け翁座し給ふ
潮その果てをおもふ芋粥をすより銃後の人ら
子と國史ひもとく子の眼澄んで對く寒空

長野 原 蝦煎子

まそらに山が峠からな下の湖とある
葉の色が濃くなつて一日一日、くれる

秋田 池田 亜杜子

一路向ふへ伸びてゐる夏來し
若葉のごとく入口いざなふごとく
清水ののみ埃を拂ひ
職場大きく夜明けたあかりさへづり
夏近いこゝに鉄洗ふにほひし

東京 山本 蒼天

葉のない枝ばかりとなつてこの家日當りよし
梅のつぼみ勤めかはつた勤めに出てをる
雪の日夜の道も面テもでられてゆく

東京 宮林 釜村

男蠶種を負うて寝る事幾夜
蠶飼ふ家々の間取とよなふ
五月の風地を打つを背に山に向つて
男袴着て云ふべきだけの事は云ふ
毛蟲地に落ちころがれり朝

東京 木下 笑風

快報たのしく子の葉書見る蘭秀で
ぼけと梅霧かけて朝な陽へ移す
おくれとるなと祈願する社頭梅咲き

横須賀みかき公園にて稔と面會

水兵服よく似合ふ陽やけ枯芝に坐し

宮城 佐藤 露江

龍骨併列海へ吹雪いてゐる

昏れごろの空の青さは鈴懸に鈴ばかり

星を吊り月を掛け寒ンが美しいまいばん

東京 中島せい作

蛙の聲もまだ寒い臆にならべたものおまつり

にぎりめしもつて豆の花はなしにきた

牛のある家ときいて青葉で白い障子が日ぐれ

さくら暮れても白いポンプの水をくみにきてゐる

松の木からずつと下は水田の晝蛙の聲

京都 財馬 呵歩

壁の世界地圖火鉢に火を入れて診察がはじまる

子供小さな風持つて鴉かあかあなくばかり

雪の枯木の空の風の

昭南 中田 紅甫

巢に風吹き親鳥餌を匿へ戻り來

一途に咲きし散つてゆく花の白素馨

辻を曲るところ急に風ありて佛桑華

印度義勇娘子軍訓練

銃を抱きたり女軍木蔭に散り伏せり

伊豫 白石花 馱史

草の花をふむ一兵のごとくひとり
櫛の芽だちの林あり動く部隊あり
遠くは見えず春の海のはてにおもふみいぐさ
日ざし周の水底に石につきてどんこ黒き魚

東京 加藤 羽双

氷柱地にとどき親しむを灯の家内

廣く雪面石狩の野の木の穂

義足で迎へてくれる水田水霜信濃の川べり(杉郎居)

會津裏山春の來し架稻場荒鍛

波のうねりが巖頭超えその浪に飛ぶかもめ鳥

新京 重村 雪人

しばらくは夕景にうみのある、思索

では、月夜の雪の白城子を發つ

大阪 中原 我樂

男木蓮咲く方へ行つたきり日くれる

この躰が低く我顔の位置白いもくれん

男は男の仕事をもちつゝじ咲く山邊

春の陽島の彼方に入り岩が浪にかくれる

白雲のありやうたけて薊の花は(悼藻川)

長野 吉澤 句唾郎

見てゐた雀もおりてきて拾つてゐる冬

線路の向ふにも一軒春らしく雪の汚れてきてゐる

製材所の裏を通つてゐる線路も雪解時

ポストのまはりだけ雪消えた町で疎開者として來て

種井へも雪どけ水の濁つてきて夕べ夕燒

東京 南 晴 星

南瓜畑の地ごしらへと鯉を入れた池と決戦来る庭
守る 國土緑濃くて我等に桐の花咲き
戦局息づまるこゝち青葉ながらあを海のごとく
うごくもの馬一びきをり部落竹の秋

學徒出陣の彰三君飛行精進中殉職

薄日桐が咲く空一ぱい桐の花にしたく

長岡 小林 銀 汀

砂利舟春日がさして流れずにゐる
櫻めぐんで居る少年たち二禮二拍手
川上から青空が流れてくる雪を捨てて居る
お狐のとんがった耳三月の雪がふる
雪鬨にぼうつと月のある牛欄曳いて行く

近江 若林 乙吉

一つ家あり年寄めて蠶豆をちぎり
山の春雪に人さまよふがごとしこのみち
春風春雨飼料足れば一つの牛が歩み
歩厚い石段を上り木を落つる雪音
雪みち通り越すこれの知つた男冬帽
靱おろしたる水田太陽は土から出る
亡き父の日のその日の花のいちはず咲いて

大阪 木戸 夢 郎

江田島紀行二句

生活の垢が流れてゐる川の海へ出る夕べ
丘陵起伏する海ぼたの道があつて麥の穂
聞きわけのよい子笥の皮が剥がれてゆく

富山 高橋良太郎

おくやみ言ふて出て暮れぎはしろき梅も
くらしい花灯のところ明るい花まんかい
花兩の手目にあてて泣いてゐる
お櫃かかへて來あたたかいごはん
鳩ういてつぼめとんで日曜出勤

東京 高橋 晩 甘

家まはりやたら豆を蒔き黒いもんべのをばさん
敵機來らず日を夜を木々の芽のあきらか
僕に多少の感懐妻が作りたる春菊を籠に
未歸還一機といふかなし菜の靈たちて咲けり

靖國神社臨時大祭所見

父と妻らしき遺族に東京の櫻が白くて風ふき

兵庫 池田 詩 外 樓

但馬朝來山吟行

見遙かして山又山、ここに櫻のやま日を上にして
突兀と巖、點々と櫻早きは散り
巖早や採つたらしい跡もあるといふこゑ
せまいいへで大勢客してしろいめしくらくなる
ガラスに見えていつも君のゐる役場のさくらがつぼみ

鎌倉 井 出 台 水

時とてをぞも馬鈴薯のさぐりぼり
寺の地面ラの玉葱があからさままろげて
戦果艦いんげんの竿立ちどこまで登る
茄子植ゑん鞍築を戦地からたより
サンルームにある向きの花南瓜立體作り

句 蓆

□海紅東京句會六月句座

兄は乙女等と麥刈り召され征くに間あり
仔雀吾等行くに翔ち低い梅の樹をうつる
日々平常の心梧桐あをい葉をうごかし
や、青い熟麥刈つてしまふ人ら畝幅
麥は豊作梅雨前の風音の木々
茗荷が茂つてゐる芥を埋めてしまふ
やつととりついた尾根駒草咲くひとこ
天地麥秋ひとところだけ水田
夏夕味噌汁を吸ふにわれに家無き
蒼葉に映ゆるみほとけ千年のすがた
ものゝ臺石あり咲くさつきのはな
夜に居り窓のそとのそら木のざくろの花
もう山梔子の花が咲いたこの家に來て主人に對す
夏日古びたる箕を持ち地から身をおこす
界限間に沈む五月夜の星を景色とす
農家民家粟の花が咲くこどもふとり
海あをいへつとよき野の麥秋の空

□層雲東京(本願寺)句會

温泉だけは昔のままの障子は破れたままのつつぢの白
青梅ごろの峽に入り雨ふる橋をわたる
防火水槽にたつぷりと水若葉の雨の日續く
警報の出でゐる空が曇つて桐の花が紫
梅雨に入らるらしき空の風が栗の花
てふてふと頬かむりしてはたけに行く
沙満ちて來てからすちよつと白帆
ふと子のことを蜂が窠にゐる木

嫁ケ君 六加士 多句 不村 釜中 寒骨 美雄 金次 青起 洋吉郎 鷺水城 一思 眞魚 羽双 晴星 一碧樓

井泉水 秋紅蔘 蒼天 砂吐流 青吐夫 草土子 浩二 冠二

月夜の風があるにはある豆の花
待てば遅い月おそい電車待つてゐる
校舎の黒くあるいゝ月となつて寝ころぶ
馬鈴薯の花なかなかなか捨て難し一面さいて鳥
石のち穂に出ておほほばこ
晝は静かすぎるとホームのきれたとこ紫苑の花
防空壕の苺一粒またうれてゐる日の出前
椿の赤さも締め終つた雨戸のさんの音
ひつそり張板日向の花片
お社雀の宿といつたやうな赤い鳥居
ばけつのはなびら今日の御儀の御堂前禮しては行く
ふきぶりの傘は斜に池のはた一八の花
花の上給水塔の見えてゐる厨の水に豆腐沈ませてある
とんとん草き了へた葛蒲雨となり
わが手白い縋帯の風に散る花
蛙の聲もまださむい膳にならべたものお祭り
山吹咲いてゐる生垣犬が吠はいりする
山門をでて移のすずしく十薬の花
だいてでてそよ風のぼらが純白
幾人か此道を行き英霊として青葉の道けふ

□上野の會(七月一日)

あるいてゆく朝鋪道鳴る街樹たつぷり葉たれ
初夏の朝空へガスタンクふくれてゐる
諸うゑ助けけんすはだしにをり解除メガホン
背のびしてトマトのわき芽をつんだ
疎開のほこり浴び南瓜實を留めてゐる
爆音めぐりめぐる日の菜園繩でかこふ
泳いでる子の肩が光る麥の穂も流れ
團員年の多い男ぞろひじんこたへた軍歌

星成 爐中 望子 遙子 正子 晶子 菁子 至道 健水 云草 庭草 八洲 落郷 一徑 香樹 せい作 巴水 淳一 光二 俊子

雀曾 健治 九子 正子 西人 南人 敏治 正子

句評

原 鈴華、山田宗作、井手逸郎

夜の朴の花の向ふ戦線うごき (冬三)

【鈴華】此の句、戦線の「スケッチといふ感じ、夜空にもくつきりとうき出る朴の花の白さ、その白さを通して壮大な戦線をとらあつかつたところ、躍動したリズムを感じてよろしいと思ひます。

【宗作】「戦線うごき」はよく言ひ得てゐる。私は前線、銃後一體であるところの「戦線うごき」であると見てゐる。前線、銃後いづれに在る作家も等しくこの「戦線うごき」にまで押して來なければならぬと思ふ。さうした所、「夜の朴の花の向ふ」が一層深い表現として生きてくる。

【逸郎】朴の花を自分は知らないが、その花が夜であることに自分は満腔の同感をもつ。山がかりの在所の家で朴の花がさいてゐるので、作者は戦線思慕の感じを、随分と細く暗示的に打ち出したものだ。朴の花のゆらぎを言外に味はしながら、しかも朴の花の向う身近に戦線を感じてゐるところの作者の瞬間的の心のゆらぎを托した句ぶりである。もののゆらぎと心の揺曳と交錯してゐるところを實に絶妙に出してゐると思ふ。海紅句風の特徴はよく出てゐる。かやう抒情味の句は、舌たらずにして而も餘情掬すべきこの句の句ぶりの如きものによるの外はない。

夏來る部隊と部隊と山が大きいかたち (愛水)

【鈴華】満洲部隊にゐる兵隊さんであり、同時に作家から生れた句のやうです。満洲の廣い山野にゐる部隊がよく出てゐるやうです。「山が

大きいかたちに」の表現は面白いと思ひます。私は此の表現の方法、見方が面白いと思ひます。いかにも満洲の山らしい感じがします。「夏來る」との關聯も自らにあると思ひます。一語して、がつちりとした皇軍の威力を表現してゐるのも、此の句の力でありませう。しかも、此の句から作者の瀟灑な性格すら匂ふて來ることも好ましい。

【宗作】戦陣にある作家のおのづからの慟哭である。「夏來る部隊と部隊」は雄渾である。世の小ざかしきものすべてを捨てきつた、さうした部隊と部隊の重厚な息吹が生きてゐる。「山が大きいかたちに」といふ「に」の置き方も細心にして、然も大膽な表現である。「に」は起承轉結の「結」を全うしてゐる。

秋蠶あげた後の家を廣くして立つて行く (若水)

【鈴華】佳句だと思ひます。「廣くして」この一句の中に何かすがすがしい潔しさ、日本人らしい、いや日本人にして始めて持ちうるやうな、深い氣持を感じます。私はそれがいいと思ひます。

【宗作】家を廣くして立つて行くはよく見てゐる。かうした易しい表現にもよく戦ふ山村の人々の心がこもつてゐる。然し、一句をよみ下して、すこし早く句に成りすぎたといふ感はある。勿論、それは作品の重量の軽さといふ點での話だ。

【逸郎】この句、評者は作者の内面を可成り深く知つてゐるが故に無條件にうなづかれるものがある。飯田の奥といへば信州の只中、立つて行く者は作者の弟と見る。父母老ひて作者は出稼ぎの永年の中等教員生活、多忙の農家の、しかも出征軍人の家の、いまは只一人の働き手の弟が、秋蠶あげてほつとき出てゆく、農家の心のこの隙の中を、召集令狀手にもつて勇躍出て行く。作者は木曾福島から在所へかへつてきて弟を見送る。作者は上り框の上にあるのではない。座敷

の上にある。さればこそ「家を廣くして」の客観が成り立つわけ、「立つて行く」といふ言葉は弟の勇躍出陣を見送つてゐる作者の深い感懐の吐露であるばかりでなく、「立つて行く者」の姿である。結局この句は、出征者のはたらきの隅々にまで心を配りながら、しかも、あとの家の磐石の安泰感を仄めかしつゝ、而もその安泰感の裏付けの中に、兄弟の心のつながりと老父母への心の働きかけをも表現して、仲々味のある、若水風の朴素の句である。少しリズムは例によつて固過ぎる。うるほいと機ひとがほしい。

たしかにももの芽ぶく夜のあめサアチライト (敦之)

【鈴華】 晩春から初夏へ胎動する夜情をうたつたもの、サアチライトの眩しい光芒が青葉に美しく出て居ります。雨脚すら美しく出てきます。巧みな句であると思ひます。

【宗作】 「サアチライト」の入いり方は不賛成である。賢い軽快な表現ではあるが、リズムに乗りすぎてゐる。「たしかに」は最上のものではないが可成練れてゐる。

【逸郎】 この句もものと心の揺曳の交錯を微妙に打ち出したものであるが、清爽さとそれから「客観の座」の固定したところに層雲句風の特徴を看取する。海紅句風には「主観の座」の巨大なる椅子を見る。

捷ちぬく顔々氷柱伸びる夜の繩綱へり (ゆきひと)

【鈴華】 つつましい農人の生活がよく出てゐるやうです。繩綱ふ生活は、それは一夜二夜ではなく、冬の幾夜も續く生活でありませう。しかも、「氷柱伸びる」の具象の中に含まれてゐるものを、じつと噛みしめて見るによつて、此の句は私たちの胸に長期戦にも堪へうる力を植ゑ付けてくれるでせう。「捷ちぬく顔々」に多少言ひ放つた言葉の

強さを感じると云ふ見方もありませうが、大東亜戦争のさなかの作品として見逃していい瑕だと思ひます。

【宗作】 古人は俳諧は取合せなりと言つたが、この作の「顔」「氷柱」「繩」は只詞葉を並べただけで、取合せの妙とは言へない。折角の良内容の句にも氣魂の籠りが無い。敢て捷ち抜くといふ言葉を用ひず、ひたぶるに農民の雄々しい姿を咏むべきである。

【逸郎】 繩綱うてゐる顔には勿論老ひのしわがある。それが顔を伏せてゐるのであらうが、この句ではその顔は作者に向つてあいさつしてゐる。無言にして強烈なる日本の決意のあいさつを。雪國の冬の夜の情景として一種のみちのく風の風格ある句である。顔々と氷柱が複數であることも、にぎやかさを感じさせないで却つて冷厳なるものを感じさせるその微妙の味ひのところ、この句の難點が伏在すると見てもよろしい。

子を守りひそやかに 菟麻をもちてみた (迷々可)

【鈴華】 純情のこもつた句、此の句少し感傷的な句ひ、弱さがしないではありません。しかし、深く考へてみると、「ひそやかに」の中に反へつて強いものを持つてゐるやうです。子を守る軍國の母のつましい姿をうたひあげたものと見ていゝやうです。

【宗作】 「子を守りひそやかに」といふ度しい心持について「みた」とふ結句で止めたのは失敗である。「みた」はよそよそしい響きを與へる。

【逸郎】 夏末の烈日の中にある一つの銃後圖繪である。自分は鉢巻した女の子の子守りと菟麻のたねとを等分に思ひ浮べながら、尙この句の主人公について混迷をもちつけけないわけにゆかない自分を發見する。この句は作者の姿なのか或は子守の子の姿であるのか。

句
輯

喜谷 六花

木蓮 いまさかり 句に 没し 野納
 木瓜 一木 咲くそこを 荒起し 植ゑるもの まだ考へてない
 早春 篋の ひゞきに 誦むいつまでも 同じ文句 金剛經
 蒲公英の 花に いたゞき 無しそこ にとゞ 莖が 残る
 菜萸の 花に いたゞき 雪のある 山の 大きさ
 町燕が 飛ぶ 彼戦線に 在らんを 想ふ 洛陽
 春くさに 足を 濡らす 氣持の 農女 朝の 空

秋山 秋紅 蓼

墓の 前 征くを 告ぐる 初夏の 花を
 子供と 犬と 隣組 農園 茄子の 花
 月夜 静かなり 吉田 松陰の 墓のある 森
 深碧の 海あらば 敵あらば 必殺 月 明行
 夏夜 窓に 明け 工員 一列 交替する
 鐵を 打つ 音夜を 徹す 工場 全員 揃へり
 雲の 峯くづれる 海の 距離を 索敵

林 雀 背

爆音 子供もう 模型 機手に 佇つて いる
 起ると 蓖麻の 手入もう 子の手が とよかない
 少年 戦車 兵 罌粟の 花の ひるが へる 見て いる
 電車 ぎつしり 皆立つ 中の 兵隊 さんが 大きい

待避 しばし 壕に 少女 白百合を いだき
 待避 解除 壕と びだし 子ら 模型 機は なち

細谷 不 句

春 晝 兒 供らに 水筒の 水 くれる 兵隊 さん
 雪 つもると 思ふ 柱 太しき 家の うちに 眠り
 野 蒜 とりて 来て たうべ ふかき 眠り 兒 供
 藏 と 藏 に は さまり て 住む 燕 くる 時 分
 麥 畑の 起伏 へ ふかく 行くに 家 に 棟 がある
 機 を は なれて しばらく ある 航空 兵 チェウ リップ
 土 筆 の は かま とる 人 羽 織 に 紐 がある

内 島 北 瑤

かうして 銃 後 日 だまり 小豆 色の あづき
 竊 を 信州 に 移す

若 葉 の 中 の 柿 若 葉 の 竊 の 火 猛り
 勤 勞 日 に 焼 けて 歸る 我 が 子 夕 焼 け
 う れ 麥 萬 歳 々 々 遠 く 兵 を 送る 聲 き こゆ
 今日 は は が き 一 枚 來 た きり の 草 し げる

奥村 四 絃 人

海 陸 へ の 應 召 者 旗 ふり 交す 栗 の 咲き 垂れ
 兵 營 の ま はり の なぞ へ 兵 しきり に 畑 作り
 應 召 者 子 を 抱いて 薰 風 を 營 門 の 方 へ
 甘 藷 し か と 根 づいた らしい 朝 な 夕 な の ひ と き
 古 女 房 體 溫 祕 して 去る 藤 蔓 の び ち も た
 螢 す い と 垣 越 え て 今 宵 は 平 熱
 防 毒 面 の 點 檢 す ます 青 葉 に 機 音 しきり

安齋櫻碗子

男引きそめし神居ます苗代の苗を
水づきの草といはず草を刈る戦意ゆるがず
あけぼの音なし梅雨じめる堤も橋も
聞き澄ます鳴きやめて居しかつこう鳴くか
山に眞晝の風音花咲く雑木の木にして
雲一つなし山田の高きにも代掻いて居る馬
山鳩 山鳩と飛ぶから松も空もまさを

杉山 田庭

風窓を打つ襟を合して前線報道の訴ふる聲を聴け
見よりベットの一本一本に少年工が打ち込む純眞な火花の散るを
敵はわが足下を覗きに來た素破蹴つ飛ばせ醜の長騰

惇君入團

學徒のうしろへ廻り伸び上つて強い壯行の旗振る

惇半僧君

私の知る限り「一日一生涯」の信念に生きて來た君
病に伏して三たび春を迎ふ有難しけふ第二十五回大詔奉戴日

渡邊砂吐流

梅の匂ひ、灯影は厨の道具がうつつてゐて
このへんに一つの自働電話へ棒が咲いて人がある
街が花ぐもりの地下から黄色な電車が出てくるところ
工員合宿所の屋根にふとん咲き出せば早いさくらで
しみじみ湯の中さくらどきの雨の降りつゝの音で
どこもさくらあれこれ御遺族案内する
花びらが散り敷いてゐる水たまりは飛べる子で

古林巴水樓

月は暈きてれんげうが咲いてゐるので
咲きききつてゐる夜空になる
畑の白い花月夜にして風が通る
日の透けて葉かげの梅の實はさがすほどな
照るに若葉のかげるに病葉の落ちてあるに
きびしい世の、花がはや若葉になつて風ふく
日々に陽が高くなる影の軒のつる草

朝倉九鴉子

北海道行五句

ひばり鳴き壓す雲閉づ原野おもへ纏霧の
のぞみはてなくこや揚雲雀陽どろ雪の原
展望春の芽吹き見え來る根室は遠し
芽吹春也古代文字とや船も行く道
海は日本五月みちのくさくらとに見ゆ

上ノ山温泉

しぐれししばしば藏玉の空鴉二點々

松宮 寒骨

母と子と麥をふむ赤石白根山の赤鱗け
けやき冬木なかぐんぐんあるく朝
日かげにあり大きな石春蘭咲けり
こどもひとりくる土手の枯芝をふみふみ
兵隊に兵隊のほひがあり柏餅たうべ
炭とりとり牧場に出た牛が顔よせ
遅櫻さく工人として學徒莞爾たり

内田南艸

小田原海岸にて二句

燕濱に飛ぶ戦時日本お前のやうだ
海の監視はいつも同じ色で朝が又来る

出征中の四君へ

君が征つてから燕が便もてくる
椰子繋る島か君征くところ
夜風互に聞く翌の征で立ち祈ら
五月太陽のやうな心の持主で征かれる

妹尾美雄

大方もんべの人薄着の人春日
草木春來る辛夷まだ咲かぬながら
應召の覺悟を云ふ君が家すもゝ花咲く
鼻大きくて應召の君が顔春朝
凡そ遺族の人達の中にまじり上野の山かすみ
うとぎを摘み川上へ川上へゆくに
地につつ立ちゴム長をはいてをる柳が芽ぶき

伊東俊二

穗が出て裸麥小麥月が出て
お濠の柳の景色松の景色黒い傘をもち
青い青い空とかざぐるまと、子の親として
線路の横白い墓地があるそれが夏になる
お客をした日の壺の白菊夜ねむる
この頃どこもニュウスの時間が青くて椎の匂つてゐる道
青葉の碑を讀み前行く人にある道

萩原井泉水

益子に濱田庄司君を訪ねて、七句

麥の穂たづね來て櫛の若葉や長屋門の見えてくる道
藤と、つつじは少しすがれて仕事着の好く似合ふあるじ
若葉の仕事場はすこし暗くてろくろしてゐる手のまま語り
皿にゑがいて初夏の江の山とは見えて帆ばしらをかく
益子は古い窯場として土取る山か山に桐さく
永い日かたぶくに畑中てんと花さく桐の遠い山なみ
リイチの談も麥の穂入日が赤い歩きつつ語り

中塚一碧樓

げんげ咲くそしてわらんべの口べの黒子
山が根を張つて寒いこの日苗代
ふるき石採場のそこら古びたり春蟬が鳴く
馬を下りてから夏の日ぐれの地面
五加木の味は遠縁の者のごとし晝飯に食ふ
水嵩が薄暑道の兩側小川流れる
進軍晝顔の花がちらつく

西垣正禪子

海に灯が敷ありて赤くわがすこやかな夏
夏の雨を來て茄子の二ツ三ツ少なに話す
曉の雨はこの街の少女の海に出る肌に降る
はるか松原のみちのたかまり警報をきく
床下の朝顔鉢を敷へ夕の孤寂にまけまい
麥秋の麥中に祈り隣組土に旗たてる
兒童はげめ眼がくらくらする熱れたる麥穂

編輯後記

○太平洋の戦局はマリアナ諸島來寇を繞つていよいよ熾烈化した。俳句人も日本國民たる以上一層覺悟の牢固たるものを持たねばならぬ。即ち、劍を持たぬ迄もお互ひは職域に同じく戦つてゐるのだ、と云ふ自覺を常持することが肝要である。

○我らの俳句國民運動は、嘗ての俳句運動の様なる俳句精神と云ふ一つの固定せる美的範疇により作句せしめる水平運動ではない。我らの俳句精神とは無形なもので然かも、縦に三千年來の民族歴史を一貫してもちつつある所の無形なもの、所謂、無限性を持つものである。而して、それが思想的に體系化され、現實的具體的に表現されて有形な俳句となる。俳句精神とは生産的意志であり、それは美的個性化し、體系化する意志の根源的實體である。従つて、俳句の大道とは作句に於ける或時代の特殊な現象の傳承ではなく、無限絶對的生命の希求である。俳句の歴史的發展の正しき地位に於いてそれを確保せんとするものであるから、「嚆型的の美なるが故

に」の短詩性では勿論ないのである。一口に言へば生活希求の内的必然の要求として根源的なるもの磨鏡である。日本人の歩むべき道を體感せねばならぬ如く、俳句作家は俳句人の大道を練行せねばならないのである。かゝる「日本と共にある俳句の大道」の求明は、わが思想戦の初一步であり、此道の徹底こそは皇戦の根本義であると信ずるものである。

○評句と云ふものは評者の意見の不一致が應々問題になる。これに就いて知つて置かねばならぬことは、評句は俳句の研究であり、諸説の不一致は時に讀者に批判眼を磨かせる機會ともなると云ふ事である。我々は評者の言葉のうち明日の俳句の聲を聞き取ることが何より大切である。兎に角、實踐問題から超結社的に検討せられる事は眞に時代に於ける新しき俳句の開花であらう。評句提出者は層海陸の各社代表者が持ちよつたものである。(中禪子)

○眞葛野太郎氏(岐阜)六月十二日逝去
○高輪藻川氏(西宮)六月十四日逝去
○堀江孟氏(秋田)六月十八日逝去。謹而哀悼申し上げます。

投稿略規

- 一、層雲 壇 萩原井泉水選
- 宛先、世田谷區松原町一ノ八三 伊東方
- 一、海紅句錄(近作抄共) 中塚一碧樓選
- 宛先、世田谷區上馬町三ノ一〇 五〇
- 一、陸 集(陸風集共) 西垣正禪子選
- 宛先 足立區伊興町狭間八八七
- 句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。
- 句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されし、一人一ヶ月一稿一選者に限ること。
- 一、メ切 毎月十五日
- 一、句稿以外の投稿は本誌發行所宛。但し、當分の間舊各誌の發行社宛に送稿されし。陸社は舊「新日本俳句」「多羅葉樹下」「白塔」「北斗」の四社へ。
- 一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各誌の發行所宛に願ひます。但新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本社」へ送金せられたし。

本誌定價

- 一册分 金七十錢(送料)
- 六册分 金四圓二十錢(送料)
- 十二册分 金八圓四十錢(送料)
- ・前金(なるべく振替)で御拂込下さい。
- ・必ず何月號よりと御指定の事
- ・御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷 第二號

昭和十九年七月廿五日印刷納本
昭和十九年七月三十日發行

發行人 中塚直三
編輯人 西垣隆滿
印刷人 檜山公一
東京都小石川區諏訪町五六

印刷所 株式會社 常磐印刷所
東京二二六

發行所 俳句日本社

振替東京一七六〇六四番

日本出版會 一五〇〇四
會員番號

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

戦線及入營の諸氏の投稿に限り軍事郵便はがきにて差支なし

みいくさ集

人々ひたに國護るところ栗のはなしろに暮れ
 嶺々の雪嶺をかぎり眠つて待機
 射撃五分前汗が火炮にしみる
 銃聲やみ熟麥を胡弓の小輩が來る
 鐵條網とすこし離れてたんぼの咲く花
 列車に銃眼があり菜の花に風あり
 輸血すべし炎天この椰子の花咲き
 國かけて戦ふみんな朝の霞切を聞く
 春の雨ふり地に濡れたる幾筋もの線路と兵
 山の青さに湖の青さに生き日々戦迫り
 明けると戦争の仕事と芽ぶく木立ばかり
 兵馬曉闇をゆくすずかけの葉の動くほど白み
 事實のきびしさ、ことばは、如月さむし
 工場ここを戦場として桃の花を挿す
 花火勝つまではあげないこんぼん月夜おまつり
 たべられる草などもたべてみた明るい夕餉の箸おく

原 丈 鳳
 泉 東 三
 倉 持 茂
 深 澤 夜 舟
 富 岡 の ぼ る
 本 間 昇
 村 松 針 石
 山 田 蒲 公 英
 林 さ あ を
 川 島 南 海 城
 橋 本 淳 一
 南 川 鴻 亮
 山 本 耕 生
 北 田 千 秋 子
 鈴 木 折 嶺
 池 田 詩 外 樓